

2023 年度
部局自己点検・評価報告書
(評価対象年度：2022 年度)

新潟薬科大学
応用生命科学部
大学院応用生命科学研究科

目 次

1. まえがき
2. 評定について
3. 応用生命科学部 自己点検・評価
 - I. 教育活動について
 - I-1. 学生の受入れについて
 - (1) 広報活動について
 - (2) 入学者選抜・入学試験結果について
 - (3) 新入学生の状況について
 - I-2. 学習成果について
 - (1) 教育課程の編成・実施について
 - (2) 学修成果について
 - (3) 授業運営について
 - I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について（学部、研究科共通）
 - (1) 学生修学・生活支援について
 - (2) キャリア支援について
 - I-4. AP、CP、DP、3 方針の整合性について
 - II. 研究活動について（学部、研究科共通）
 - III. 社会連携・社会貢献活動について（学部、研究科共通）
 - III-1. 国際交流について
 - III-2. 高大連携について
 - III-3. 地域連携について
 - IV. 教員・教員組織について
 - IV-1. 教員組織について
 - IV-1. FD 活動について（学部、研究科共通）
 - V. 定員・学費の適切性について
4. 大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価
 - I. 教育活動について
 - I-1. 学生の受入れについて
 - I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について
 - I-3. AP、CP、DP、3 方針の整合性について
 - II. 教員・教員組織について
 - III. 定員・学費の適切性について

1. まえがき

新潟薬科大学応用生命科学部及び新潟薬科大学大学院応用生命科学研究科は、常に質の高い教育と研究を追求し、生命科学のさまざまな応用分野において社会への貢献を目指している。自己点検・評価は、学部/研究科の教育活動、研究活動、社会連携・社会貢献活動、教員・教員組織、定員・学費の適切性などを客観的に分析し、目標達成度、課題の把握、将来の展望を明確化するための重要なプロセスである。本報告書は、2022年度における応用生命科学部/応用生命科学研究科の自己点検・評価報告書である。

2022年度の学部/研究科の点検・評価では、2021年度の部局自己点検・評価に引き続き、「I-3-(2)キャリア支援について」及び「Ⅲ-3 地域連携について」の2項目は評定Sであった。キャリア支援に至っては、就職活動をうまく進められていない学生への早期支援等を行い、就職内定率を2017年度以降100%に維持していることが高く評価できる。また、地域連携活動に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響で中止していた市民向け公開講座「医療・健康講座」、「新潟薬科大学交流の会」の再開等、対面でのアクティブな活動が多数見受けられた。応用生命科学部「I-4 AP、CP、DP、3方針の整合性について」、応用生命科学研究科「I-3 AP、CP、DP、3方針の整合性について」の2項目については、2021年度の部局自己点検・評価から評定をBに下げた。これは学習成果の達成度評価に対し、アセスメント・ポリシーに示されている指標を活用した質的・量的な解析の提示に至っていなかったことによるものであり、早急な改善に取り組んでいきたい。過年度からの課題である「定員充足問題」は、生命産業創造学科から生命産業ビジネス学科への学科名変更に伴う特化した広報活動が実施できたこともあり、生命産業ビジネス学科の2023年度入学定員は充足できた一方で、応用生命科学科の入学定員充足率は低下した。専願入試志願者の減少などいくつかの原因があると考えられるが、現状を的確に分析し、入学者の定員充足へ向け、特色ある学部/研究科の教育の実施と広報活動強化、入学試験選抜の検討等、入学志願者増加のための有効な施策を講じる必要がある。

新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後、これまでに制限されていた教育・研究活動のうち真に必要なものを回復させるとともに、コロナ禍で生み出されてきたデジタル技術の多様な教育実践の工夫を取り入れることによる新しい学びの在り方を進化させていく必要がある。自己点検・評価による現状の把握と分析は、課題の抽出と改善だけでなく、学部/研究科の発展に寄与する新しい学びに繋がるため、新たなPDCAサイクルの起点として、「2023年度 部局自己点検・評価報告書(評価対象年度:2022年度)」を活用していきたいと考えている。

2023年9月15日

応用生命科学部長、研究科長

質保証推進委員長、研究科質保証推進委員長

高久 洋暁

2. 評価について

I. 評価の基準

2022年度の各項目における評価は、以下のSからCの4段階評価とした。

S	高い水準で取り組み、卓越した成果があがっている。または特筆すべき取り組みを行っている。
A	適切な取り組みがなされ、成果があがっている、または近く確実な成果が見込まれる。
B	積極的な取り組みがなされているが、十分な成果には至っていない。
C	ほとんど取り組みがなされておらず、成果があがっていない。

II. 評価一覧

応用生命科学部 自己点検・評価

項目名	評価
I. 教育活動について	
I-1. 学生の受入れについて	
(1) 広報活動について	B
(2) 入学者選抜・入学試験結果について	B
(3) 新入学生の状況について	A
I-2. 学習成果について	
(1) 教育課程の編成・実施について	A
(2) 学修成果について	A
(3) 授業運営について	A
I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について（学部、研究科共通）	
(1) 学生修学・生活支援について	A
(2) キャリア支援について	S
I-4. AP、CP、DP、3方針の整合性について	B
II. 研究活動について（学部、研究科共通）	A
III. 社会連携・社会貢献活動について（学部、研究科共通）	
III-1. 国際交流について	B
III-2. 高大連携について	A
III-3. 地域連携について	S
IV. 教員・教員組織について	
IV-1. 教員組織について	B
IV-2. FD活動について（学部、研究科共通）	B
V. 定員・学費の適切性について	B

大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価

項目名	評定
I. 教育活動について	
I-1. 学生の受入れについて	A
I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について	A
I-3. AP、CP、DP、3方針の整合性について	B
II. 教員・教員組織について	B
III. 定員・学費の適切性について	B

3. 応用生命科学部 自己点検・評価

I. 教育活動について

I-1. 学生の受入れについて

(1) 広報活動について **評価：B**

応用生命科学科は、2023年度の入学者を80名（前年比-17名、82%）迎え入れたが、入学定員充足率は67%であった。生命産業ビジネス学科は、入学者51名（前年比+25名、196%）を迎え入れ、入学定員充足率は113%となり、2022年度の生命産業創造学科（入学定員60名）から、入学定員を削減したとはいえ、入学定員を充足することができた。（【図表 3_I-1_(1)-1：過去6年の入学者数と学部全体の定員充足率】）

本学における2023年度の入学者は、前年度までに新型コロナウイルス感染症の蔓延による首都圏などへの進学者減少があり、その反動があったことが予想される。一方で、医療技術学部、看護学部の新たな設置に伴い、潤沢な広報予算が全学的に確保されていたことによる積極的な広報施策を実施できた。看護学部は入学定員に達しなかったが、薬学部は前年度比+20名、医療技術学部では入学定員が充足され、積極的な広報の効果があつたと推察される。特に、生命産業ビジネス学科は、2023年4月に実施した学科名変更の周知のために、学びの内容の明確化等の学科に特化した広報活動を実施することができたため、学科開設以来、初めて入学定員を充足することができたと推察される。

一方、応用生命科学科は、広報活動に注力したにも関わらず、大きく入学者を減らすことになった。「医療・健康系総合大学」の中において、応用生命科学科の存在感がより薄くなってしまったことが原因の1つとして考えられる。

また、本学の同じ4年制の新学部（医療技術学部、看護学部）へ一部の受験生が流れた可能性も考えられる。応用生命科学科では、7年連続定員割れとなり、学科の存続に影響する危機的な状況にある。

応用生命科学科における入学者減少の要因は様々考えられるが、広報活動もその要因の1つであると考えられるため、評価はBとした。

2022年6月に学内の組織変更があり、従来の広報室から入学広報センターに改組された。これに伴い、予算執行をはじめとした業務プロセスが、学部単位ではなく、センター単位へ変更となった。夏のオープンキャンパスまでが主要な広報活動の時期である中、組織変更が実施された時期的な影響もあり、追加広報を講じるには厳しい状況であった。来年度以降は、早期に実施する広報計画を作成し、取り組んでいきたい。

オープンキャンパス参加者数は、新型コロナウイルス感染症の影響による行動制限が緩和されてきた中であるにもかかわらず、応用生命科学科においては前年度より減少した。一方で、生命産業ビジネス学科は倍増した。（【図表 3_I-1_(1)-2：過去4年のオープンキャンパスへの参加者数(3年生+既卒生)】）オープンキャン

ンパス参加者数は、入学者数と相関を持つ重要な指標と捉えており、引き続き、参加者数増加に向けて、本学部の教育研究活動の魅力が志願者に伝わるような広報施策を検討し、活動する予定である。（【図表 3_I-1_(1)-3：過去4年のオープンキャンパスからの出願数(全学)】）

本年の広報活動は、YouTube、TikTokなどのインターネット動画広告を実施した。夏のオープンキャンパス向けの動画は、クリック率が高く、オープンキャンパスへの動員には一定の効果があったと考えている。一方、3月の共通テストC日程向けのインターネット動画広告を首都圏ユーザー向けに行ったが、効果は認められなかった。

2021年度まで実施していたDM（ダイレクトメール）については、その効果が不透明であったこともあり、2022年度は実施しなかった。生命産業ビジネス学科の入学者数は増加しており、DMの有効性についてはさらなる検証が必要である。

高校生向けの進学ガイダンス等は、【図表 3_I-1_(1)-4：過去5年のガイダンス等実施状況】に示す通り、合計数としては、昨年同様の回数に参加し対応した。ガイダンス等への参加者はあまり増えず、入学者数への効果があったとは考えにくく、実施イベントの取捨選択など課題が残る。

【図表 3_I-1_(1)-5：過去4年の都道府県別入学者数】に都道府県別の入学者数を示した。応用生命科学科については、新潟県内からの入学者数が減少した（82名⇒69名、前年比84%）が、新潟県外からの入学者は（15名⇒11名、前年比73%）さらに減少割合が大きいことから、今後、新潟県外における施策の検討が必要である。

上記した広報の点検から抽出された課題へ向けた2023年度の施策は以下の通りである。

1. 応用生命科学部独自の広報活動の実施

「医療・健康系総合大学」は、本学の特質を表しているが、応用生命科学部のイメージ広報には利用が難しいため、TVCM、動画広告などいくつかの広報手段は応用生命科学部独自で制作する必要がある。

2. 高等学校訪問の強化

新潟県内及び近隣県は、元高等学校教員である進学アドバイザーと教員ならびに事務部入試課が協力体制を築き、高等学校訪問を行う。首都圏に関しては、本学へ進学の可能性のある高等学校のリストアップした上で、スクールプランナーを活用した訪問を検討する。また、訪問時の説明内容を検討する。

【図表 3_I-1_(1)-1：過去6年の入学者数と学部全体の定員充足率】

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
応用生命科学科入学者数（定員120名）	94	95	101	108	97	80
生命産業創造学科入学者数（定員60名→2023年度は45名）	33	27	35	35	26	51
学部全体の充足率 [%]	70.6	67.8	75.6	79.4	68.3	79.3

【図表 3_I-1_(1)-2：過去4年のオープンキャンパスへの参加者数（3年生+既卒生）】

	2019年度			2020年度			2021年度			2022年度		
	県内	県外	合計	県内	県外	合計	県内	県外	合計	県内	県外	合計
応用生命科学部	76	12	88	67	6	73	74	12	86	72	5	77
生命産業創造学科	24	0	24	18	1	19	20	2	22	56	2	58

※3年生+既卒生の合計

【図表 3_I-1_(1)-3：過去4年のオープンキャンパスからの出願数（全学）】

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
オープンキャンパス参加者数	188	266	320	689
出願者数	91	143	152	313
出願率(%)	48.4	53.7	47.5	45.4

【図表 3_I-1_(1)-4：過去5年のガイダンス等実施状況】

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
会場ガイダンス	34	45	24	59	54
学校見学	19	27	7	19	30
高校ガイダンス	69	47	78	109	141
出張講義	31	40	33	61	51
その他（資料配付会など）	25	9	31	36	6
合計	178	168	173	284	282

【図表 3_I-1_(1)-5：過去4年の都道府県別入学者】

	入学者の高校県															計	新潟県外割合(%)		
	新潟	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	東京	富山	石川	山梨	長野	その他				
2023年度入試	応	69	1	1	2	1	3				1			1	1	80	11	13.75	
	産	47		1			1							2	0	51	4	7.84	
2022年度入試	応	82	1		6	1								5	2	97	15	15.46	
	産	20			1		2		1				1	1	0	26	6	23.08	
2021年度入試	応	83		1	5		3	1	2	2		3		1	6	108	25	23.15	
	産	34					1								0	35	1	2.86	
2020年度入試	応	83	1		5		1		1			1	1		3	5	101	18	17.82
	産	29	1		1	1	1								2	35	6	17.14	

(2) 入学者選抜・入学試験結果について **評定：B**

応用生命科学部では、各学科で策定された入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー：AP）に基づき入学者選抜を行っており、学力の3要素「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」を身に付けていることを求め、全入試区分においてこれら3要素の修得の程度を確認している。また、各入試区分において課す試験内容とAPとの対応も明確に定めている。

2023年度入試において、入学者は前年度と比べて応用生命科学部は17人の減であったが、生命産業ビジネス学科は25人の増となった。応用生命科学部は全体の志願者数を多く減らしたが、特に総合型選抜および学校推薦型選抜を併せた入学

者が51人から35人と16人減少し、この2つの入試区分における入学者の減少分がそのまま2023年度の入学者数に影響を及ぼした（【図表3_I-1_(2)-1：2022年度入学試験実施状況】、【図表3_I-1_(2)-2：2023年度入学試験実施状況】）。2023年4月に実施した生命産業創造学科から生命産業ビジネス学科への名称変更は、「経済学」、「経営学」、「文系」というキーワードが明確となり、学ぶ内容がわかりやすくなったことで、好調な数字となったと推察される。

また、一般選抜・個別方式における歩留まり率(入学者の全合格者に対する割合)は応用生命科学科40.0%、生命産業ビジネス学科26.0%であり、前年の42.7%、55.0%より両学科とも減少している。一般選抜・共通テスト利用方式における歩留まり率は、応用生命科学科18.3%、生命産業ビジネス学科26.9%であり、前年の12.8%、10.3%より両学科とも向上している（【図表3_I-1_(2)-1：2022年度入学試験実施状況】、【図表3_I-1_(2)-2：2023年度入学試験実施状況】）。特に応用生命科学科では、2020年度以前は20%以上の入学者があったが、近年、歩留まり率は悪く、入学者も少ない。

一方で、生命産業ビジネス学科は志願者数が安定しておらず、年度によるばらつきが多くなっている。2023年度入試は一般選抜においても志願者が増加したのでこの状況を維持しつつ、志望度の高い受験生の他に、併願校としての受験生が増加することで、志願者数全体を向上させることが今後の課題の1つである。

2022年度の入学者について、入学試験の成績と入学後の成績を比較し、入学試験内容の妥当性を検討した。応用生命科学科においては、すべての入学試験種別において、入学試験時の成績が上位である学生は、1年次の成績も上位となる傾向が認められ、入学試験内容は妥当だといえる。生命産業ビジネス学科においても、人数は少ないもののほぼ同様の傾向が得られ、入学試験内容は妥当だといえる。

入学者選抜の制度においては、学力の3要素の測定精度の向上および出願方法をよりシンプルにするため、次の5点において改善を行った。

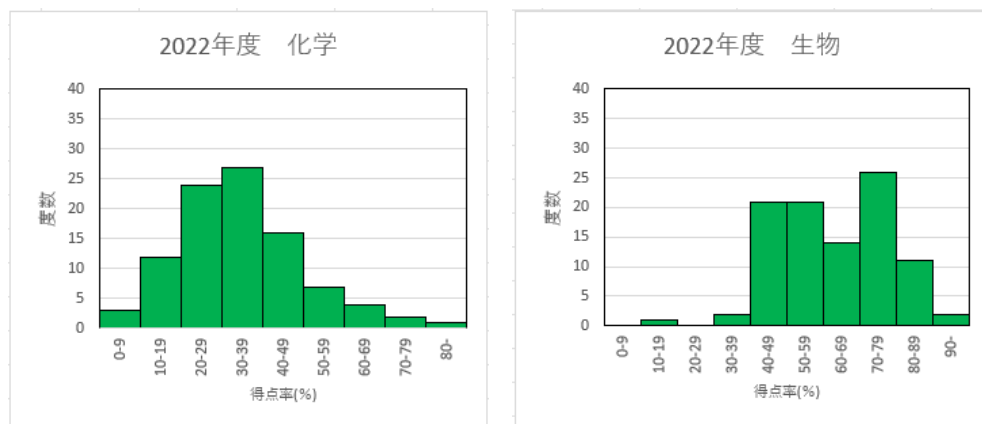
- 1) 総合型選抜に『課外活動重視型』を導入
- 2) 各入学試験種別における提出課題等の再検討
- 3) 応用生命科学科の一般選抜個別方式において2科目から他大学の多くの生命科学系学部と同様3科目の試験を課す
- 4) 生命産業ビジネス学科の一般選抜・個別方式において、『日本史』及び『世界史』を選択可能とする
- 5) 生命産業ビジネス学科の一般選抜・共通テスト利用方式において、科目選択をグループ型から教科選択とする

これらより2023年度における入学者選抜においては、計画に基づき正確に実施したこと、次年度に向けた入試改善方策の検討を実施することができたが、応用生命科学科は入学定員を充足することができなかつたため、総合的に判断し評価はBとする。

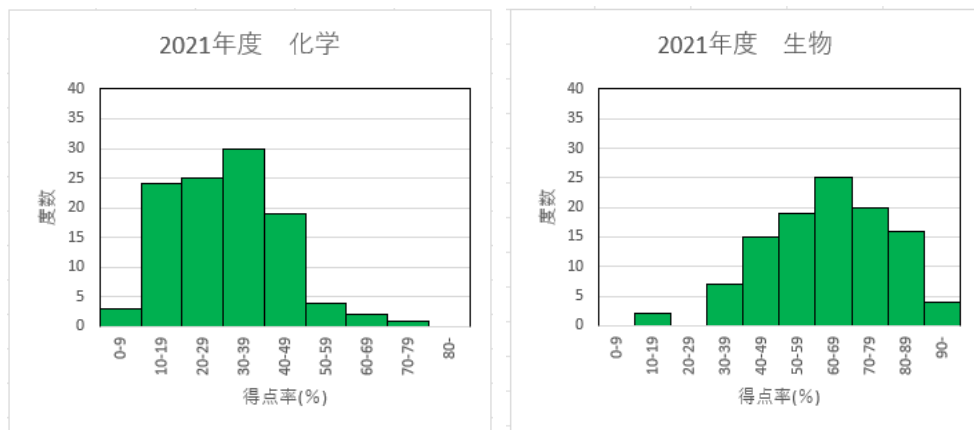
年度のヒストグラムは 60-69%の得点率が最大数を示していたが、2022 年度は 70-79%が最大数であり、40-49%の得点率が 2021 年度よりも多い結果となり、学力の 2 極化の傾向が窺えた。各問題の正答率を 2 か年で比較した結果、「生物の分類」、「細胞小器官」、「細胞分裂」、「タンパク質」についての正答率が比較的低く、この傾向は 2021 年度と同様であった。このように把握された弱点は、1 年次、2 年次に開講される生物関連の授業を通じて補強していく必要がある。

なお、化学と生物のプレイスメントテストの内容ならびに採点方法については 2022 年度に点検を行い、2023 年度に向けての改定作業を実施した。

【図表 3_I-1_(3)-1：2022 年度応用生命科学科プレイスメントテスト結果（化学、生物）】



【図表 3_I-1_(3)-2：2021 年度応用生命科学科プレイスメントテスト結果（化学、生物）】

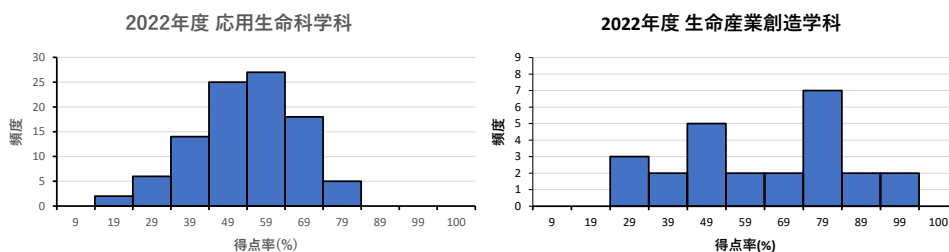


英語については、応用生命科学科の 2022 年度の平均得点率は 48.8%であり、2021 年度の 49.9%よりも若干低下していた。ヒストグラムを見ると 2021 年度、2022 年度とも、50-59%の得点率が最大数を示した。2022 年度においては、2021 年度に見られた 80%以上の得点率の学生が認められない一方、2021 年度に見られなかった 10-19%の得点率の学生が若干名認められた。

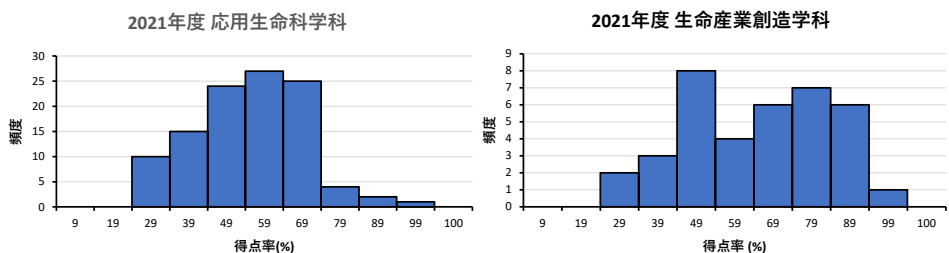
■生命産業創造学科

2022年度の英語の平均得点率は58.2%であり、2021年度の59.5%よりも若干低下していた。ヒストグラムを見ると、2021年度は、40-49%の得点率、70-79%の得点率に多くの学生が認められたが、2022年度は、70-79%に最大数が認められた一方で、20-99%の間にほぼ一定の数が分散している傾向が認められた。英語の授業は、応用生命科学科では学力別のクラスでの授業を実施しているが、生命産業創造学科は学生数の関係上、一つのクラスで授業を実施している。英語の授業については、両学科のプレイスメントテストの結果等を活用し、両学科共通による学力別の授業運営の可否について検討を進めたい。

【図表 3_I-1_(3)-3 : 2022年度プレイスメントテスト結果 (英語)】



【図表 3_I-1_(3)-4 : 2021年度プレイスメントテスト結果 (英語)】



プレイスメントテスト結果を活用した新入生の学力状況については、教授会において情報を共有し、各授業の運営に活用した。以上のことから、概ね順調に運用ができたと考えており、評定をAとした。

I-2. 学習成果について

(1) 教育課程の編成・実施について **評定：A**

2021年度入学生から、改定した新しい学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー：CP）が適用されている「応用生命科学部 教育研究上の目的と3つのポリシー」：<https://www.nupals.ac.jp/applied/policy/>。DP、CPの改定に合わせてカリキュラムの改定を行い、2021年度入学生から、新カリキュラムが適用されている。DPの達成にむけて重要な項目を示した

カリキュラムマップを公開するとともに、各科目の関連性、教育課程の順次性を視覚化したカリキュラムツリーも公開した《カリキュラムツリー、カリキュラムマップ：応用生命科学科：https://www.nupals.ac.jp/wp/wp-content/themes/new-nupals-ac/img/page/about/syllabus/pdf13.pdf、生命産業創造学科：https://www.nupals.ac.jp/wp/wp-content/themes/new-nupals-ac/img/page/about/syllabus/pdf18.pdf》。

2022年度は、新カリキュラムを運用した2年目であり、カリキュラム改定に伴う課題の抽出を行いながらであるが、大きな問題なく実施運用できている。2023年度に新設される医療技術学部ならびに看護学部に合わせて、主に教養科目を中心とした全学又は学部共通科目（情報リテラシー、外国語、体育、キャリア教育等）を検討し、配置した。さらに、生命産業創造学科の生命産業ビジネス学科への名称変更に伴うカリキュラムの点検を行った。ただし、名称変更の届け出の手続き上、大幅な改定は難しいため、名称変更4年後を見据えたカリキュラムの改定に向けた点検作業に着手した。

2021年度に引き続き、初年次教育の向上のために、新入生に対して高等学校で履修してきた生物と化学の学習内容について調査した。調査結果は教授会において情報共有し「初年次セミナー」実施の参考として活用した。

2021年度に制定したアセスメント・ポリシー（AsP）を評価の指標として、DPに対する達成度を評価するディプロマルーブリック表の策定を進めたが、完成には至らなかった。

以上のように、カリキュラム改定に伴う教育課程の実施をほぼ問題なく行うことができ、2023年度の改組に向けた準備を遅滞なく行えたことから、評定をAとした。

(2) 学修成果について **評定：A**

■GPA 値の活用

従来から、科目履修時にGPA連動型CAP制の導入による学生の科目履修指導を行っている。さらにコース配属、研究室配属、成績優秀者奨学金制度（2022年度以降）、特待生制度（2021年度まで）、学業成績優秀者の決定にもGPA値を活用している。

■学年到達度試験実施による学習成果の把握について

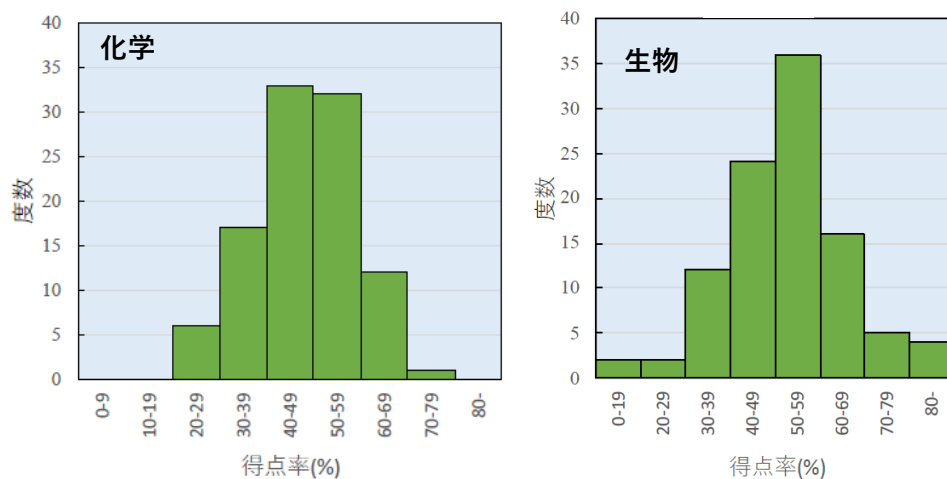
両学科ともに年次進行に伴う学習成果把握のため、履修科目の定期試験とは別に、年度当初の時期に学年到達度試験を実施している。応用生命科学科の2年次学生には化学、生物について、生命産業創造学科の2年次、3年次学生には英語について学年到達度試験による学習成果調査を行った（【図表3_I-2_(2)-1：2022年度2年次応用生命科学科到達度試験結果（化学、生物）】、【図表3_I-2_(2)-2：2021年

度2年次応用生命科学科到達度試験結果(化学、生物)】、【図表3_I-2_(2)-3:2022年度生命産業創造学科2年次到達度試験結果(英語)】、【図表3_I-2_(2)-4:2022年度生命産業創造学科3年次到達度試験結果(英語)】。

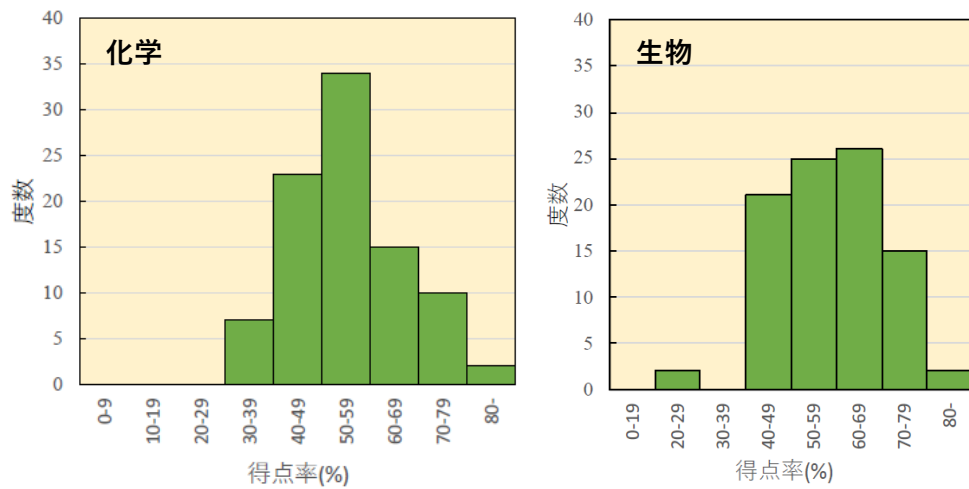
応用生命科学科については、学年到達度試験結果(化学、生物)を前年度(2021年度)と比較した。化学の平均得点率は48%であり、2021年度の55%よりも低い値となった。ヒストグラムでは、2021年度には50-59%の得点率が最大数だったものが2022年度には40-49%の得点率が最大数となっていた。出題分野による得点率からは、「酸と塩基」、「化学結合」、「アルケンの反応」、「立体化学」を苦手にする学生が多く、例年通りの傾向が示された。生物の平均得点率は52%であり、2021年度の58%よりも低い値となった。ヒストグラムでは、2021年度には60-69%の得点率が最大数だったものが2022年度には50-59%の得点率が最大数となっていた。出題分野による得点率からは、「タンパク質の構造」、「クリステ」、「減数分裂」、「基質酵素反応速度」、「形質」、「遺伝子型」を苦手にする学生が多く、例年通りの傾向が示された。2022年度に到達度試験問題を改定したため試験結果を単純に比較することは難しいが、学年到達度試験による学習成果調査結果は教授会にて情報共有し、授業設計の参考とした。

生命産業創造学科については学生数が少ないこともあり、年度による比較、評価が難しいが、2年次、3年次とも2021年度に比べて若干の平均値の低下が認められた。2年次、3年次とも難易度が準2級レベルの問題でも正答率が低い問題が少なからずあるため、基礎的な部分から修得させる必要がある。

【図表3_I-2_(2)-1:2022年度2年次応用生命科学科到達度試験結果(化学、生物)】



【図表 3_I -2_(2)-2:2021 年度 2 年次応用生命科学科到達度試験結果(化学、生物)】



【図表 3_I -2_(2)-3:2021 年度生命産業創造学科 2 年次到達度試験結果(英語)】

平均値 (年度比)

2022年度 (22S)	2021年度 (21S)
19.26	21.00

2022年度結果詳細

レベル	問題数 (合計50問)	正答率70%以上 の問題数	正答率70%未満 30%以上の問題数	正答率30%未 満の問題数
英検3級	10問	2問	6問	2問
英検準2級	20問	0問	14問	6問
英検2級	20問	0問	12問	8問

【図表 3_I -2_(2)-4:2021 年度生命産業創造学科 3 年次到達度試験結果(英語)】

平均値 (年度比)

2022年度 (22S)	2021年度 (21S)
20.71	19.57

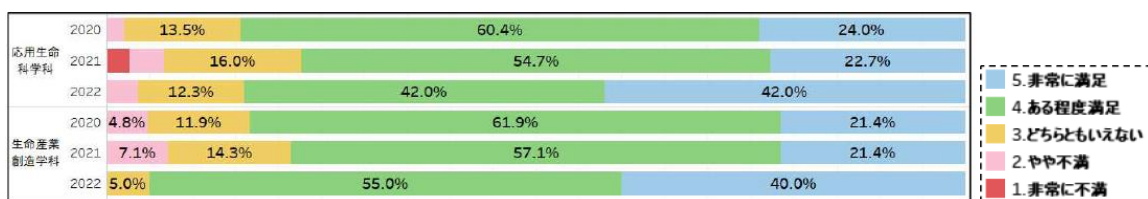
2022年度結果詳細

レベル	問題数 (合計50問)	正答率70%以上 の問題数	正答率70%未満 30%以上の問題数	正答率30%未 満の問題数
英検準2級	20問	3問	9問	8問
英検2級	30問	1問	21問	8問

■ 卒業時アンケートによる満足度の把握について

卒業時アンケートを用いて、学生生活の満足度を把握した（【図表 3_I-2_(2)-5：卒業時アンケート結果】）。アンケート結果は、教授会にて情報共有するとともに大学ホームページに公開した。2022 年度の卒業時アンケートにおける「大学生生活全体を通じての満足度について」の問いに対し、「非常に満足」、「ある程度満足」を回答した学生は、応用生命科学科で 84.0%、生命産業創造学科で 95.0%であり、特に「非常に満足」と回答した学生が 2021 年度と比較しても多く、高い満足度を提供できたと考えている。

【図表 3_I-2_(2)-5：卒業時アンケート結果】



「【設問 5】 大学生生活全体を通しての満足度を以下の 1~5 で評価してください。」

■ 理科教職コースについて

応用生命科学科の理科教職コースでは、4 年の卒業時にコース独自のアンケートを実施している。教職課程の履修により、「教職の意義と役割を理解、および子どもの発達に関する知識と基本的な指導の方法を習得できた」と全員が回答していた。また、「教職に関する科目は実践的な学びがあり、興味・関心を持って取り組むことができた」と複数の回答があった。一方で、少数ではあるが、「授業運営や学級経営などに関する知識・技能の不足に不安を持つ」という回答もあった。教員採用試験のための対策演習は、受講者全員が効果的であったと回答した。面接練習は、何に気をつけるべきかわかりやすい解説があったため、自信がついたとの感想があった。

■ 卒業状況、留年/休学/進級状況

2022 年度の卒業生は、応用生命科学科 81 名、生命産業創造学科 22 名であり、4 年次学生の卒業率はそれぞれ 97.59%、100.00%であった（【図表 3_I-2_(2)-6：入学者推移（大学情報より）】）。なお、応用生命科学科理科教職コースの卒業生は 10 名であり、全員が卒業した。進路の内訳は高等学校教諭 1 名、中学校教諭 6 名、中学校非常勤講師 1 名、一般企業 2 名であった。教員採用試験は 9 名が受験し、そのうち 8 名が何れかの自治体に合格することができた。

2022 年度 1 年次学生の 2 年次への進級率は、応用生命科学科において 92.78%（1 年次学生 97 名中、4 名退学、3 名留年）、生命産業創造学科において 84.62%（1 年次学生 26 名中、1 名退学、3 名留年）であった。応用生命科学科では、2021 年度

とほぼ同等の進級率ながら、退学者が2021年度の1名に比べて4名は多い数であった。また、生命産業創造学科の留年者3名も2021年度の1名に比べて増加した。これらの結果は大きな課題であり、このことを受けて、2023年度入学生には入学直後の4月にフレッシューズセミナー(友人関係を構築し、大学生活に馴染ませ、入学時の意欲を一層高めるための授業)における合宿研修の必要性が考えられたため、コロナ対策緩和を受け、再開する方針を決定した。

2年次から3年次、3年次から4年次への進級率は応用生命科学科でそれぞれ88.00%、100.00%、生命産業創造学科で97.30%、96.77%であった。応用生命科学科2年次から3年次への進学率が2021年度の92.59%よりも低下した。この原因については、今後引き続き調査を行い、課題を明確化し、改善策を講じていく。

以上のことから、課題はあるものの、新型コロナウイルス感染症の収束に伴い、対面授業にオンライン授業技術も取り入れた教育課程の編成・実施が機能し、学修成果もほぼ満足できる状況であるため、評定Aとした。

【図表 3_I -2_(2)-6 : 入学者推移 (大学情報より)】

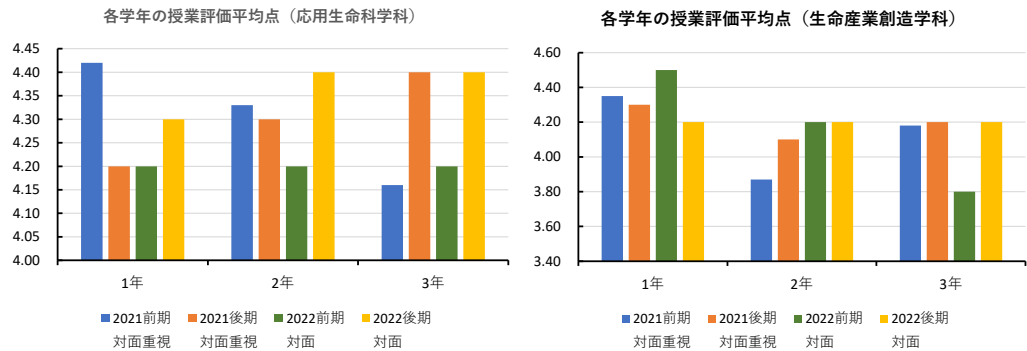
【応用生命科学科】																										
入学年度	H31 (2019)						R2 (2020)						R3 (2021)				R4 (2022)			R5 (2023)						
	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	
入学者数 5月1日現在	95	93.68%	5	5.26%	1	1.05%	101	86.14%	8	7.92%	6	5.94%	108	92.59%	1	0.93%	7	6.48%	97	92.78%	4	4.12%	3	3.09%	80	
2年次数	89	95.51%	2	2.25%	2	2.25%	87	93.10%	3	3.45%	3	3.45%	100	88.00%	4	4.00%	8	8.00%	90	-	-	-	-	-	-	-
3年次数	85	97.65%	0	0.00%	2	2.35%	81	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	88	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
4年次数	83	97.59%	1	1.20%	1	1.20%	81	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
卒業者数	81	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

【生命産業創造学科】																									
入学年度	H31 (2019)						R2 (2020)						R3 (2021)				R4 (2022)			R5 (2023)					
	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部者数	進学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数
入学者数 5月1日現在	27	92.59%	1	3.70%	1	3.70%	35	94.29%	2	5.71%	0	0.00%	38	97.37%	0	0.00%	1	2.63%	26	84.62%	1	3.85%	3	11.54%	51
2年次数	25	96.00%	0	0.00%	1	4.00%	33	93.94%	0	0.00%	2	6.06%	37	97.30%	0	0.00%	1	2.70%	22	-	-	-	-	-	-
3年次数	24	91.67%	0	0.00%	2	8.33%	31	96.77%	1	3.23%	0	0.00%	36	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4年次数	22	100.00%	0	0.00%	0	0.00%	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
卒業者数	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

(3) 授業運営について **評定 : A**

すべての授業科目について授業評価アンケートを実施し、教授会にて情報共有を行うとともに、一部情報は大学ホームページに公開している。新型コロナウイルス感染症への対応を講じながら2021年度は対面を重視した形で、2022年度は対面で授業を実施した。授業評価アンケートの総平均点を比較したところ(【図表 3_I -2_(3)-1 : 2021年度、2022年度授業評価アンケート平均点】)、両学科とも新型コロナウイルス感染症の影響による授業形態の変化によって授業評価の変動は引き起こされず、高評価回答であった。これは各授業担当教員による状況に応じた授業構築ができてきている成果であると推察される。

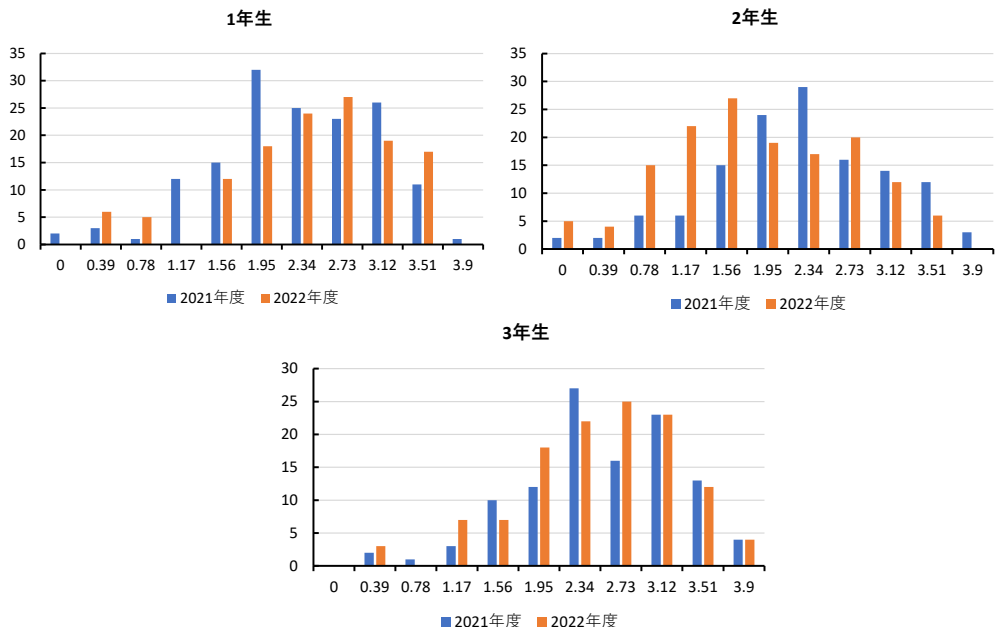
【図表 3_I-2_(3)-1：2021 年度、2022 年度授業評価アンケート平均点】



授業評価アンケートにおいて、特に評価の高かった科目担当者には、授業方法の工夫や評価が高くなった原因を文書にして提出してもらい、それを配信することで情報共有した。評価の低かった科目担当者には「授業改善計画書」を提出するよう指示し、改善を促した。

2022年度の1年次から3年次学生の通年 GPA 値のヒストグラムを作成した【図表 3_I-2_(3)-2：2022 年度 GPA ヒストグラム】。2021年度と2022年度で比較したところ、2022年度の2年生の GPA 値が2021年度よりも低い傾向がみられた。これは2020年度入学生の2年次カリキュラムと2021年度入学生の2年次新カリキュラムでは、授業科目が大きく異なることが影響していると推察される。1年生、3年生の GPA のヒストグラムの分布においては顕著な違いは認められなかった。また、成績分布は正規分布に近いヒストグラムの形状からも教員による成績評価がしっかりと行われていることが確認された。以上の授業評価アンケート及び教員による成績評価結果から授業運営はほぼ良好に実施できたと判断し、評定は A とした。

【図表 3_I_I-2_(3)-2：2022 年度 GPA ヒストグラム】



I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について（学部、研究科共通）

(1) 学生修学・生活支援について **評定：A**

■学生交流支援活動

【図表 3_I-3-(1)-1：1年次学生アンケート】

設問1) 以下の中で実施をしたら参加したい企画を選んでください。	人数	
	応	産
・友達づくりの機会となるようなイベント	21	4
・大学周辺や新津の町を知るイベント	10	3
・セミナー、講演会など教養を身につけるイベント	4	2
・勉強の仕方を学ぶイベント	3	1
・防災、緊急時への対応などに関するイベント	2	0
・その他（自由記載） 応：大学行事を知るイベント、研究室を知るイベント、BBQ 産：なし		
設問2) 入学して約1ヶ月が経ちました。今、不安なことや困っていることなどありますか？	人数	
・学業についていけない	19	2
・友達づくり、交友関係	9	2
・未回答	12	6
・その他（自由記載） 応：テスト勉強、一人暮らし、新生活、経済面 産：単位が取れるか、定期試験		

新入生の実態を把握することを目的に、新入生を対象とするアンケート調査【図表 3_I-3-(1)-1：1年次学生アンケート】を2022年5月に実施した。回答率は両学科ともに38.4%（応用生命科学科40名/104名、生命産業創造学科10名/26名）と高くなかったものの、「実施したら参加したい企画」の設問では、「友達作りの機会となるようなイベント」が両学科とも全体の4割以上を占めていた。新型コロナウイルス感染症流行前の2019年度までは、入学直後の4月にフレッシュャーズセミナー（友人関係を構築し、大学生活に馴染ませ、入学時の意欲を一層高めるための授業）を実施していたが、本年度も昨年度に続き、コロナ禍の影響で実施を見送っており、新入生にとって友達作りの機会の設定が必要な状況であると確認された。このアンケート結果を受け、学生同士の交流、友達づくりのきっかけを提供することを目的に、体験型イベント「謎解き脱出ゲーム」を企画し、10月29日（土）の午前中に新型コロナウイルス感染症対策を徹底した上で実施した。学生の参加者は9名（1年生7名、2年生2名）と非常に少なかったが、参加学生には好評であり【図表 3_I-3-(1)-2：学生交流イベント参加学生アンケート】、学生間および参加した教員と学生間の親睦を深める良い機会となった。

また、「今、不安なことや困っていること」の設問では、応用生命科学科の回答者のうち約5割が「学業についていけない」を選択しており、学業に不安を抱えていることが確認された。「学業についていけない」と感じている学生への対応として、2023年度は、早期に学生が抱えている問題点などを詳細に把握するため、4月～6月頃にアドバイザー学生と教員の面談を実施する予定である。

【図表 3_I-3-(1)-2：学生交流イベント参加学生アンケート】

設問 1) 今回のイベントはいかがでしたか。	大変良かった	良かった	あまり良くなかった
	7	0	0
設問 2) 今回のイベントは、学生同士の交流の機会となりましたか	そう思う	あまりそう思わない	
	7	0	

新型コロナウイルス感染症の影響によりここ数年、開催が見送られていた「研究室対抗ソフトボール大会」については、学生への意向調査から実施を希望する学生が多数を占めたことから、例年、学生が企画運営していたものを教員主催へ変更し、新型コロナウイルス感染症対策を徹底した上で11月6日（日）に新津キャンパスのグラウンドにて開催した。日曜日にも関わらず多くの学生・教員が参加して熱戦が繰り広げられ、学生間だけでなく学生と教員間の交流の場となった。

次年度の学生交流活動支援については、新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の学生間の親睦を図るイベントを検討・実施する。

■ ドロップアウト防止対策

【図表 3_I-3-(1)-3：出欠状況調査の実績】

応用1年生	前期	後期	前・後期 警告者実数 A	学生数 (5.1現在) B	警告率 A/B	警告者(A)うち 退学者数 C	警告者の 退学者率 C/A	当該年度の 退学者数 D	当該年度退学者のうち 警告・退学者の割合 C/D
	警告者	警告者							
2022	12	19	25	104	24.0%	5	20.0%	7	71.4%
2021	11	13	21	111	18.9%	1	4.8%	1	100.0%
2020	-	11	11	102	10.8%	1	9.1%	8	12.5%
2019	5	6	10	97	10.3%	7	70.0%	8	87.5%
2018	6	8	12	98	12.2%	4	33.3%	8	50.0%
2017	17	11	21	111	18.9%	4	19.0%	5	80.0%
2016	20	11	26	141	18.4%	8	30.8%	10	80.0%
平均	11.8	11.3	18.0	109.1	16.2%	4.3	26.7%	6.7	68.8%

応用2年生	前期	後期	前・後期 警告者実数 A	学生数 (5.1現在) B	警告率 A/B	警告者(A)うち 退学者数 C	警告者の 退学者率 C/A	当該年度の 退学者数 D	当該年度退学者のうち 警告・退学者の割合 C/D
	警告者	警告者							
2022	16	16	28	105	26.7%	3	10.7%	5	60.0%
2021	12	11	15	93	16.1%	1	6.7%	4	25.0%
2020	-	19	19	93	20.4%	1	5.3%	3	33.3%
2019	3	9	9	93	9.7%	2	22.2%	3	66.7%
2018	9	5	10	113	8.8%	2	20.0%	2	100.0%
2017	11	9	16	136	11.8%	2	12.5%	11	18.2%
2016	12	26	34	120	28.3%	3	8.8%	4	75.0%
平均	10.5	13.6	18.7	107.6	17.4%	2.0	12.3%	4.6	54.0%

生命産業1年生	前期	後期	前・後期 警告者実数 A	学生数 (5.1現在) B	警告率 A/B	警告者(A)うち 退学者数 C	警告者の 退学者率 C/A	当該年度の 退学者数 D	当該年度退学者のうち 警告・退学者の割合 C/D
	警告者	警告者							
2022	6	3	6	26	23.1%	1	16.7%	1	100.0%
2021	3	8	9	40	22.5%	1	11.1%	1	100.0%
2020	-	5	5	38	13.2%	1	20.0%	2	50.0%
2019	4	5	8	27	29.6%	1	12.5%	1	100.0%
2018	3	1	3	35	8.6%	1	33.3%	1	100.0%
2017	6	4	7	51	13.7%	0	0.0%	1	0.0%
2016	5	1	5	46	10.9%	1	20.0%	2	50.0%
平均	4.5	3.9	6.1	37.6	17.4%	0.9	16.2%	1.3	71.4%

生命産業2年生	前期	後期	前・後期 警告者実数 A	学生数 (5.1現在) B	警告率 A/B	警告者(A)うち 退学者数 C	警告者の 退学者率 C/A	当該年度の 退学者数 D	当該年度退学者のうち 警告・退学者の割合 C/D
	警告者	警告者							
2022	1	2	2	43	4.7%	0	0.0%	1	0.0%
2021	4	10	11	36	30.6%	1	9.1%	1	100.0%
2020	-	8	8	28	28.6%	0	0.0%	1	0.0%
2019	3	1	3	35	8.6%	0	0.0%	0	-
2018	3	1	3	50	6.0%	1	33.3%	1	100.0%
2017	8	3	8	43	18.6%	0	0.0%	0	-
2016	2	5	5	35	14.3%	1	20.0%	2	50.0%
平均	3.5	4.3	5.7	38.6	15.9%	0.4	8.9%	0.9	50.0%

ドロップアウト防止対策として、1、2年生の必修科目から2科目程度を任意に選択し、その欠席回数が3回を超えた学生のアドバイザー教員にアラートが届くシステムが整備されており、アラートが届いたアドバイザー教員は、当該学生と状況確認のための面談、ならびに指導を実施している。2022年度もこの防止対策を継続して実施した結果、警告者数は応用生命科学科1年生が25名、2年生が28名、生命産業創造学科の1年生が6名、2年生が2名となった。前年度と比較すると、応用生命科学科で増加傾向が見られた【図表3_I-3-(1)-3:出欠状況調査の実績】。警告があった退学者の割合は高い傾向にあり、ドロップアウト防止対策の重要性が確認された。3年次以降の進級率は高く、退学率は低いことから、低学年次における対策が重要であり、現状を検証しながら、新たな低学年次におけるドロップアウト防止対策の検討を進める予定である。(【図表3_I-3-(1)-4:入学者推移(大学HP掲載)】)。

【図表3_I-3-(1)-4:入学者推移(大学HP掲載)】

【応用生命科学科】

入学年度	H31 (2019)						R2 (2020)						R3 (2021)						R4 (2022)						R5 (2023)	
	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	留年率
入学者数 5月1日現在	95	93.6%	5	5.2%	1	1.0%	101	86.1%	8	7.9%	6	5.9%	108	92.5%	1	0.9%	7	6.4%	97	92.7%	4	4.1%	3	3.0%	80	
2年次数	89	95.5%	2	2.2%	2	2.2%	87	93.1%	3	3.4%	3	3.4%	100	88.0%	4	4.0%	8	8.0%	90	-	-	-	-	-	-	-
3年次数	85	97.6%	0	0.0%	2	2.3%	81	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	88	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4年次数	83	97.5%	1	1.2%	1	1.2%	81	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
卒業者数	81	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

【生命産業創造学科】

入学年度	H31 (2019)						R2 (2020)						R3 (2021)						R4 (2022)						R5 (2023)	
	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	進級率/ 卒業率	うち、退学・ 除籍・転学 部数	退学率	留年者数	留年率	入学者・ 進級者数	留年率
入学者数 5月1日現在	27	92.5%	1	3.7%	1	3.7%	35	94.2%	2	5.7%	0	0.0%	38	97.3%	0	0.0%	1	2.6%	26	84.6%	1	3.8%	3	11.5%	51	
2年次数	25	96.0%	0	0.0%	1	4.0%	33	93.9%	0	0.0%	2	6.0%	37	97.3%	0	0.0%	1	2.7%	22	-	-	-	-	-	-	-
3年次数	24	91.6%	0	0.0%	2	8.3%	31	96.7%	1	3.2%	0	0.0%	36	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4年次数	22	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
卒業者数	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

■新潟薬科大学独自の奨学金制度

薬学部における「臨床実務実習」期間中に、受講学生のアルバイトが困難である問題点を起源として全学で検討された、「新潟薬科大学修学支援貸与奨学金」を制定した。この制度は、応用生命科学部における「教育実習」期間中の学生についても適用される。

以上のことから、新型コロナウイルス感染症の影響が残る中でも、概ね適切に実施されているため、評定はAとした。

(2) キャリア支援について **評定:S**

キャリア支援活動における各種イベント等は、各学年に設定した目的に応じて、原則対面で実施した(【図表3_I-3_(2)-1:キャリア教育】)。

【図表 3_I-3_(2)-1：キャリア教育】

学年	目的
1年次	意識付け、自己理解
2年次	職業/業界理解、就活準備
3年次	就活対策
4年次	個別支援

1年生については、旧カリキュラムにおける「初年次セミナー」で実施をしていたキャリア系の内容を、2022年度から新規開講された必修科目「早期体験学習」において、一部内容を見直して実施した（【図表 3_I-3_(2)-2：ガイダンス実施実績（1年生対象）】）。

【図表 3_I-3_(2)-2：ガイダンス実施実績（1年生対象）】

4月25日 ～5月16日	web：PROGテスト実施（WEB受験）
5月13日 1限	対面：授業オリエンテーション「社会制度、経済状態、企業研究」
5月20日 1限	対面：「社会人基礎1（租税教室）」
5月27日 1限	対面：「社会人基礎2」
6月3日 1限	対面：「就職活動の予備知識」
6月10日 1限	対面：「能力の伸ばし方」
6月24日 1限	対面：「社会で活躍する先輩の話を聞く1」
7月1日 1限	対面：「社会で活躍する先輩の話を聞く2」「10年後の目標」
7月8日 1限	対面：「公務員セミナー」

2年生・3年生については、昨年度と同様に、ガイダンスの一部を選択科目「職業とキャリア形成Ⅰ・Ⅱ」において実施した。

前期ガイダンスについては、学生がより積極的にインターンシップに参加するようになることを目的に、昨年度の「外部講師による個別相談会」から「県内企業によるミニインターンシップ体験会」に変更した。この「県内企業によるミニインターンシップ体験会」は、県内企業4社及び就職情報ナビサイトに協力を得て、各社が行うインターンシップの一部分を学内で体験するというもので、2年生19人、3年生26人が参加した。

新規講座として、外部講師による「スーツ着こなし講座（2年生13人、3年生37人参加）」及び「就活メイク講座（女子学生のみ2年生6人、3年生24人参加）」を薬学部と合同で実施した。

前期ガイダンスの平均参加率は、2年生・3年生共に前年度実績から平均2～3割程度低下した。オリエンテーション等で前期の活動の重要性を伝え、ガイダンスに参加するよう指導したが、来年度へ向け改善すべく引き続き検討する。

後期のガイダンスは、昨年度に準じた内容で実施し、3年生の参加率は、7割強（教職の学生を除く）と昨年度実績からは微減だった。

【図表 3_I-3_(2)-3 : ガイダンス実施実績 (当初計画)】

日程	時限	対象	テーマ及び内容	講師
4/8	4限	2~3年	オリエンテーション 「キャリアとスキルについて」	学内
	5限		「自己分析によるキャリアの棚卸し」	学内
4/22	4限	2~3年	「就活こころの準備セミナー」	学外
	5限		「職種理解講座」	学内
4/23	4限	2~3年	「就活こころの準備セミナー」	学外
	5限		「職種理解講座」	学内
5/13	4限	2~3年	「公務員模試 (市役所型)」	学外
	5限			
5/20	4限	2~3年	「業界理解講座Ⅰ」	学内/学外
	5限		「業界理解講座Ⅱ」	学内
6/3	4限	2~3年	「小論文対策講座」	学内/学外
	5限		「情報の収集と活用方法」	学内/学外
6/24	4限	2~3年	「ミニインターンシップ体験会」	学外
	5限			
7/1	4限	2~3年	「インターンシップ事前学習」	学内/学外
	5限		「インターンシップのビジネスマナー」	学外
7/15	4限	2~3年	「スーツ着こなし講座」「就活メイク講座」	学外
	5限			
9/12	3限	3年	オリエンテーション「先輩からのアドバイス」	学内
	4限	3年		
9/20	3限	3年	PROGテスト受験	学内
	4限	3年		
9/26	3限	3年	「就職キックオフセミナー」	学外
9月下旬~	WEB	3年	【WEB受験】筆記試験対策講座① SPI (第1回)	学外
10/3	3限	3年	「自分を知る」実践 ・ワークによる自己分析	学外
	4限	3年		
10/17	3限	3年	SPI模擬試験総合解説	学外
	4限	3年		
10月中旬~	WEB	3年	【WEB受験】筆記試験対策講座① SPI (第2回)	学外
10月中旬~	WEB	3年	筆記試験対策講座② あさがく模試	学外
10/24	3限	3年	「企業研究実践講座1」	学外
	4限	3年	「企業研究実践講座2」	
10/31	3限	3年	「プレゼンテーション力の強化Ⅰ」グループディスカッション演習	学内/学外
	4限	3年	「プレゼンテーション力の強化Ⅱ」グループディスカッション演習	
11/7	3限	3年	「自己PR・志望理由作成実践講座」	学外
	4限	3年		
11/14	3限	3年	「エントリーシート、履歴書の書き方」	学外
	4限	3年		
11/21	3限	3年	「PROGテスト」解説	学外
	4限	3年	「効果的な面接の受け方」	
11/28	3限	3年	「文章力の強化」自己PR・ガクチカ個別添削	学内/学外
	4限	3年		
12/5	3限	3年	「WEB面接体験」	学内/学外
	4限	3年		
12/12	3限	3年	「グループ面接演習」・対面面接演習	学内/学外
	4限	3年	「コミュニケーション力の強化」・対面面接演習	
12/19	3限	3年	【WEBライブ】「実際の就職活動に向けて」 「学内合同企業説明会への参加に向けて」・・・後日動画配信	学内
12月下旬~	4限	3年	「就活ビデオ上映会」・・・後日動画配信	学内
1/30	午前	2~3年	「公務員模試」	—
3/27	別途	2~3年	「公務員模試」	—

当初計画 (対面実施) 後の追加企画として、就職情報サイトやキャリア支援室によるオンラインガイダンスを実施した (【図表 3_I-3_(2)-4 : ガイダンス実施実績 (追加分)】)。

【図表 3_I-3_(2)-4 : ガイダンス実施実績 (追加分)】

日程	時限	対象	テーマ及び内容	講師
5月中旬~	WEB	2~3年	【動画配信】インターンシップ選考準備講座 (基礎編)	学外
5月中旬~	WEB	2~3年	【動画配信】インターンシップ選考準備講座 (応用編)	学外
6月上旬~	WEB	2~3年	【動画配信】インターンシップES作成講座	学外
8月9日	WEB	2~3年	【ライブ配信】夏休み直前 就活準備にすべき最新TODOリスト	学外
11月中旬~	WEB	3年	【動画配信】WEB面接対策	学外
12/22	4限	3年	【対面/ライブ】「OpenES準備講座」	学外
1/16	お昼	2年	「就活準備セミナー」	学内
2/2	WEB	3年	【ライブ配信】志望動機対策講座	学内/学外
1/30	午後	2~3年	「公務員模試解説講座」	学外

学内合同企業説明会は、昨年度の企業アンケートや新型コロナウイルス感染症の蔓延状況を踏まえて、対面開催とオンライン開催の両方を複数日程に分けて実施した。参加企業には、対面開催/オンライン開催のいずれかを選択して頂きご参加いただいた(【図表 3_I-3_(2)-5: ガイダンス実施実績 (学内合同企業説明会)】)。参加企業数及び学生の延べ参加人数のいずれも前回は上回った。説明会の運営についても、企業アンケート回答 87 社中、「大変良かった 69 社」、「良かった 17 社」、「普通 1 社」と概ね好評だった。

【図表 3_I-3_(2)-5: ガイダンス実施実績 (学内合同企業説明会)】

	2022年度	2021年度
対象学生	・23卒就活生(学部3年生:121人、院1年生:9人) ・学部2年生及び大学院進学予定の4年生のうち希望者	・23卒就活生(学部3年生:111人、院1年生:8人) ・学部2年生及び大学院進学予定の4年生のうち希望者
開催日程 開催方法	◆対面(AM/PMで企業を入替え) ①2023年1月31日(火) ②2023年2月8日(水) ◆ZOOMによるライブ配信(PMのみ) ③2023年2月9日(木) 1社25分説明を4回	①2022年2月4日(金) AM/PMで企業を入替え ②2022年2月28日(月) PMのみ ZOOMによるライブ配信 1社30分説明を4回
参加企業数	合計90社(1/31:36社、2/8:35社、2/28:19社)	合計81社(2/4:64社、2/28:17社)
参加学生数	参加者全体の延べ人数 1023人	参加者全体の延べ人数 832人

就職活動学生に対しては、例年のとおり、教員やキャリア支援室職員による個別支援を行った。学生には、各種ガイダンスで本学の就職活動個別支援の内容や活用方法などを周知したほか、Microsoft Teams に就職活動支援のチームを構築し、各種の情報提供を行った。また、キャリア支援委員による未内定者面談を、例年よりも早めて6月中旬から実施し、就職活動をうまく進められていない学生への早期支援を図った。

それらの個別支援等により、2022年度も就職希望者全員の進路が決定し、就職内定率は、2017年度以降100%を維持している(【図表 3_I-3_(2)-6: 就職/進学状況】)。

【図表 3_I-3_(2)-6: 就職/進学状況】

2023年3月卒業生: 106人

就職希望	90人	教職希望	8人	進学希望	5人	合計 103人
(応用)	(68人)	(応用)	(8人)	(応用)	(5人)	
(生産)	(22人)	(生産)	—	(生産)	(0人)	
内定者	90人	内定者	8人	進学者	5人	合計 103人
(応用)	(68人)	(応用)	(8人)	(応用)	(5人)	
(生産)	(22人)	(生産)	—	(生産)	(0人)	
内定率	100%	内定率	100%	合格率	100%	合計 100%
(応用)	100%	(応用)	100%	(応用)	100%	
(生産)	100%	(生産)	—	(生産)	—	

以上のことから、キャリア支援は概ね適切に実施され、成果も上がっているため、
評価はSとした。

2023年度も、2024年度卒就職活動学生に対しては、就職率100%の達成を目標
に、個別支援等を充実させる。また、就職（採用）活動の早期化や多様化への対応
として、インターンシップ参加の促進や低学年時からの意識付けのための取り組
みを行う。各種ガイダンスについては、より有効な実施を目指して、引き続き検討
し、実施する。

I-4. AP、CP、DP、3方針の整合性について **評価：B**

2020年度に応用生命科学部の学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー：AP）、
教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー：CP）、学位授与の方針（ディプ
ロマ・ポリシー：DP）の3つの方針を改正した。2021年度入学生より適用した3つの
方針に対しては、整合性が取れていると判断する。

しかしながら、学習成果の達成度評価に対し、アセスメント・ポリシーに示されて
いる指標を活用した質的・量的な解析の提示に至っていない点は改善の余地がある
ことから評価をBとする。2022年度8月26日（金）に開催されたFD研修会「コンピ
テンシーと達成度評価用ルーブリックの作成に関するワークショップ」を契機に、
2023年度はこの策定作業を進める。

2020年度までに入学した学生に適用されるDPにおける学生の学修成果の把握のた
め、卒業前の4年次3月に、研究室の指導教員との面談を、DPルーブリック表（4段
階評価）を用いながら実施した（実施率100%）。DPルーブリック表は、「レベル1：
かなり努力を要する」、「レベル2：努力を要する」、「レベル3：満たしている」、「レベ
ル4：十分満たしている」と4段階の尺度で作成されている。

応用生命科学科において、指導教員による客観的な評価は各項目においておおよそ
3（全平均2.98）であり、大部分の学生がDPを達成できていると考えている。しかし
ながら、学生の自己評価（全平均2.57）と指導教員の客観的評価（全平均2.98）には
差があり、特に卒業研究でその能力が大きく伸びると考えられている「論理的思考力」、
「プレゼンテーション能力」における評価の差が大きい（【図表3_I-4-1：2022年度
応用生命科学科卒業生DPルーブリック評価】）。この傾向は昨年度のDPルーブリック
評価と同様であり、指導教員と学生との間で、レベル感の共有化を図るなどの対策を
講じる必要がある。

【図表 3_I-4-1：2022 年度応用生命科学科卒業生 DP ルーブリック評価】

No.	応用生命科学科 ディプロマ・ポリシー (DP)	自己評価 (学生) 平均	客観的評価 (担当教員) 平均
1-1	1. 生命を尊重する心、他人を思いやる心などの豊かな人間性と倫理観を備え、人と人との共感の累積をめざすコミュニケーション能力を有する。	2.67	2.91
1-2	生命を尊重する心、他人を思いやる心などの豊かな人間性と倫理観、人類・地域に貢献する意欲・姿勢を備え、行動できる。 人と人との共感の累積をめざす人間関係形成ができる。	2.56	2.90
2	2. バイオ工学・環境科学・食品科学を包括する生命科学分野、理科教育分野の抱える課題を探究し解決するために、高度な知識・技能を備え、それらに応用できる能力を有する。	2.75	3.07
3	3. 数量的スキル及び情報リテラシーを身に付け、各種情報を収集、分析して適正に判断し、活用できる能力を有する。	2.44	2.98
4	4. 修得した科学的知識や洞察力に基づき、客観的かつ論理的に思考し、理解を得るための優れたプレゼンテーションができる能力を有する。	2.48	3.06
5	5. 地域的視点と国際的視野を持ち、学修経験を総合的に活用することで、地域及び国際社会の諸問題の本質を見極めながら課題を探究する能力と課題を解決する能力を有する。	2.55	2.97
全体平均		2.57	2.98

生命産業創造学科においては、指導教員による客観的な評価ではレベル3を大きく上回り（全平均 3.32）、大部分の学生が十分に DP を達成できていると考えられる。しかしながら、応用生命科学科の場合と同様に、学生の自己評価と指導教員の客観的評価に大きな差があり、その程度は応用生命科学科よりも大きくなっている（【図表 3_I-4-2：2022 年度生命産業創造学科卒業生 DP ルーブリック評価】）。この傾向は昨年度の DP ルーブリック評価と同様であり、応用生命科学科と同様に指導教員と学生との間で、レベル感の共有化を図るなどの対策を講じる必要がある。

【図表 3_I-4-2：2022 年度生命産業創造学科卒業生 DP ルーブリック評価】

No.	生命産業創造学科 ディプロマ・ポリシー (DP)	自己評価 (学生) 平均	客観的評価 (担当教員) 平均
1-1	1. 生命を尊重する心、他人を思いやる心を持つ豊かな人間性と倫理観を備え、人と人との共感の累積をめざすコミュニケーション能力を有する。	2.55	3.36
1-2	生命を尊重する心、他人を思いやる心などの豊かな人間性と倫理観、人類・地域に貢献する意欲・姿勢を備え、行動できる。 人と人との共感の累積をめざす人間関係形成ができる。	2.73	3.27
2	2. 生命・食料・農業・環境に関わる産業領域の課題に取り組む、基盤となる幅広い知識と教養を備え、柔軟な思考力を有する。	2.82	3.36
3	3. 農林水産業及び食品・環境・生命産業の事業の経営課題に取り組むための広い視野と積極的な意欲を持てる能力を有する。	2.55	3.14
4	4. ICTを用いて情報を収集・分析し、適正に判断して活用できる能力を有する。	2.32	3.23
5	5. 修得した科学的知識や洞察力に基づき、客観的かつ論理的に思考し、プレゼンテーションできる能力を有する。	2.64	3.36
6	6. 地域社会と国際社会の変化に注視し、広い視野を持って積極的に活躍しようとする意欲を持続できる能力を有する。	2.82	3.50
全体平均		2.63	3.32

II. 研究活動について（学部、研究科共通） **評定：A**

2022 年度も 2021 年度に続き、新型コロナウイルス感染症による影響の中、三密を避けるなど、基本的な感染防止対策を講じながらの研究活動となった。また、研究成果を発表する場である学会活動も制約を受けていたが、2021 年度とは異なり、対面とオンラインによるハイブリット型での開催が増え、積極的な議論と人材交流等が可能な状

況に戻りつつあった。このような状況の中、応用生命科学部教員の積極的な研究成果発表、外部資金獲得が行われたことから、評定をAとした。研究業績及び外部資金獲得状況に関する分析等を以下に記載する。

(1)2022年度研究業績（学術論文、著書、学会発表等）

応用生命科学部において、研究力は卒業論文、修士論文、博士論文の指導における重要な点の1つである。その研究に関与する成果発表は、学生及び教員の能力向上、社会貢献に繋がるだけでなく、本学部の特色である研究力をアピールする上で重要である。

各教員の研究活動状況は、新潟薬科大学教育・研究業績システム「研究業績プロ」にまとめられている。2022年度の応用生命科学部の研究業績を【図表 3_II-1：2022年度 応用生命科学部 研究業績】に示した。前年度と比較して、学術論文発表数が増加し、さらに学会発表件数が大きく向上した。これは各教員の積極的な成果発表が行われたことはもとより、対面とオンラインのハイブリット型の開催学会の増加、移動制限の緩和などの要因が積極的な成果発表の後押しをしたと考えられる。

また、2022年度は2件の特許権取得、1件の特許出願があり、本学部の特徴の1つである産業と結びつきの深い技術の知財化に成功している。さらに、日本農学賞、安藤百福賞優秀賞の受賞があり、本学部教員の研究活動が客観的に大きく評価されている。しかしながら、教員個人ごとには研究業績の偏りが見受けられる。教員個人の授業担当時間数、委員会業務量等を考慮し、各教員の専門分野で研究業績を伸ばすための協議を継続していく。

【図表 3_II-1：2022年度 応用生命科学部 研究業績】

研究業績	2022年度	2021年度
学術論文（編）	37	33
著書（編）	6	11
総説（編）	10	8
翻訳（編）	1	1
辞書（編）	1	1
国内学会発表（件）	83	52
国外学会発表（件）	5	5

(2)2022年度外部資金獲得状況

2022年度の応用生命科学部の外部資金獲得状況を【図表 3_II-2：2022年度 応用生命科学部 外部資金獲得状況】に示した。科学研究費補助金（科研費）は研究代表者を務める研究課題が13件、研究分担者を務める研究課題が1件であり、2021年度（研究代表9件、研究分担3件）から研究代表者を務める研究課題が増加した。2022年度の科研費の新規採択は、応募件数15件に対して5件（33.3%）であり、応募件数が2021年度より向上したことが採択研究課題数増加に繋がっている（【図表 3_II-3：2022年度

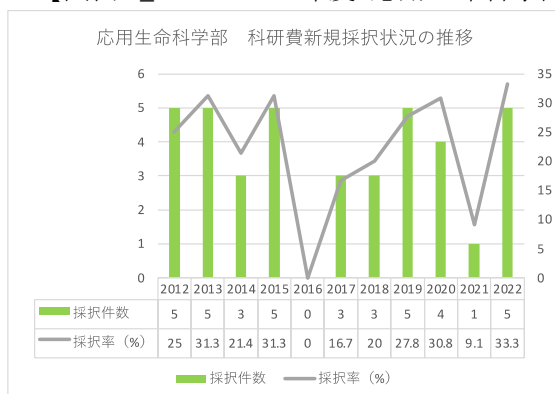
応用生命科学部 科学研究費補助金採択状況の推移】。新規採択のうち3名が2021年度不採択からの採択であり、新潟大学からご助力頂いている「科研費セミナー」、「MaSTアドバイザー制度」、また、本学が実施している「科研費リトライプログラム」の効果によると考えられる。

その他、受託研究費が12件、企業との共同研究費が11件、財団からの寄付金・助成金が9件、研究以外の受託業務（技術指導、教育連携事業等）が4件であり、助成金の件数及び外部資金獲得金額が減少した。特に実験系研究室に所属する教員における積極的な外部資金獲得がなされている一方で、教員個人間での偏りが見られる。研究費申請書作成は、自身の専門分野における研究の意義をより広く深く、実験計画をより具体的に考える重要な機会である。教員個人の申請数、採択率などを考慮した上でのサポートについて協議を継続して行く。

【図表 3_II-2：2022年度 応用生命科学部 外部資金獲得状況】

研究費名	2022年度		2021年度	
	件数	金額	件数	金額
科学研究費補助金(研究代表者)	12	23,475,409	9	17,195,962
科学研究費補助金(研究代表者)	2	1,040,000	3	589,597
共同研究費	11	11,837,000	12	17,527,000
受託研究費	12	45,378,580	12	54,338,000
奨学寄付金・助成金	9	7,300,000	16	6,500,000
研究以外の受託業務(技術指導、教育連携事業等)	4	1,691,800	3	1,266,292
合計	50	90,722,789	55	97,416,851

【図表 3_II-3：2022年度 応用生命科学部 科学研究費補助金採択状況の推移】



Ⅲ. 社会連携・社会貢献活動について（学部、研究科共通）

Ⅲ-1. 国際交流について **評定：B**

2022年度末の本学の海外協定校一覧を【図表 3_III-1-1：2022年度海外協定校一覧】に示した。2016年から2019年にかけて、毎年1校以上の連携協定を締結してきたが、新型コロナウイルス感染症の影響で2021年にマニラ・セントラル大学との締結をし

たところで止まっている。応用生命科学部の井口准教授を中心に、マニラ・セントラル大学と共同研究（Maysilo, Malabon River から分離培養されたプラスチック分解菌の特性評価）が実施されている。2022年度は、6月22日、8月24日にオンラインミーティングを実施し、解析の準備を進めている。2023年度は微生物サンプルの受け渡し等を行い、次の研究ステージに移行する予定である。

【図表 3_III-1-1：2022年度海外協定校一覧】

	海外協定校名	国・地域	締結
1	マサチューセッツ薬科健康科学大学	米国	2002年8月28日
2	長春中医薬大学	中国・吉林省	2011年5月5日
3	首都医科大学	中国・北京市	2011年10月28日
4	ニューヨーク州立大学フレドニア校	米国	2013年10月28日
5	カリフォルニア大学デービス校	米国	2015年9月17日
6	ナント大学	フランス	2016年4月22日
7	西シドニー大学	オーストラリア	2017年9月19日
8	忠南大学校	韓国	2018年1月31日
9	ランシット大学	タイ	2018年2月
10	ウィーン大学	オーストリア	2019年6月18日
11	マニラ・セントラル大学	フィリピン	2021年9月3日

外国人留学生の受け入れ、海外協定校への学生の海外研修の実施が新型コロナウイルス感染症の影響で困難な中、生命産業創造学科1名、応用生命科学研究科薬科学コース1名の外国人留学生を受け入れている。新型コロナウイルス感染症の「感染症法上の位置づけ変更」に伴い、国際交流活動の再開が見込めるため、大学としての外国人留学生受け入れ方針を確認しながら、協議を再開する。

学生海外派遣事業では、新型コロナウイルス感染症流行以前は米国、韓国、オーストラリアへ学生を積極的に派遣できていたが、新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン短期留学への切り替えが行われている。2022年度は西シドニー大学へのオンライン短期留学への募集周知を2回実施したが、参加希望者はいなかった（【図表 3_III-1-2：2022年度学生海外派遣事業参加実績】）。

以上のことから、新型コロナウイルス感染症の影響がある中で、海外協定校との共同研究が進められていることは高く評価されるが、学生海外派遣事業が停滞していることから評定はBとする。2023年度は、西シドニー大学への語学研修派遣事業を対面で実施する予定であり、コロナ禍前のような積極的な学生海外派遣のサポート体制について協議を継続していく。

【図表 3_III-1-2：2022年度学生海外派遣事業参加実績】

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
マサチューセッツ薬科健康科学大学（米国）	15	-	3	-	-	-
海外短期語学研修（米国）	2	2	-	-	-	-
国立忠南大学校（韓国）	-	1	2	-	-	-
西シドニー大学（オーストラリア）	10	4	-	オンライン1	-	-

Ⅲ-2. 高大連携について **評価：A**

■ 高大連携講座について

応用生命科学科の内容で運営されている、2021年度の「生命科学講座」は受講者数19名（うち3年生17名）、修了証（高大連携講座推薦の出願資格）を15名に授与した。そのうち14名が入学した（高大連携講座推薦3名、指定校制推薦6名、一般公募制推薦4名、総合型選抜1名）。一方、2022年度から講座名を「応用生命科学講座」へと変更して実施した本講座は、受講者数25名（うち3年生19名）、修了証を13名に授与した（うち2年生3名）。そのうち8名が入学した（高大連携講座推薦4名、指定校制推薦1名、総合型選抜3名）。2022年度の受講者数は30%ほど増加したが、2021年度と比較して入学者数が減少した。

生命産業創造学科の内容で運営されている、2021年度の「食・環境ビジネス講座」は受講者数6名（うち3年生5名）、修了証を3名に授与した。そのうち2名が2022年度に入学した（総合型選抜2名）。学科名変更に伴い、2022年度は講座名を「生命産業ビジネス講座」へと変更して実施した本講座は、受講者数14名（うち3年生10名）、修了証を9名（うち2年生2名）に授与した。そのうち6名が入学した（高大連携講座推薦2名、指定校制推薦2名、総合型選抜2名）。2022年度は、2021年度と比較して受講者および入学者数が大幅に増加した。学科名変更の周知のために、学科に特化した広報活動を実施することができたこともあり、「生命産業ビジネス講座」についても、志願者や入学者同様に増加に転じることができたと推察される。

2022年度は、2021年度に引き続き対面型講座とオンライン型講座のハイブリッドで実施した。応用生命科学講座は、オンライン型をスタートした2020年度から新潟県外出身者の受講が継続しており、2022年度は9名まで増加した。生命産業ビジネス講座においても新潟県外からの受講者数が年々増加している。新潟県外受講者を出願および入学に繋げることが課題として挙げられる。2023年度も各学科の学びの内容をわかりやすく伝えるための講座を揃えることで受講者の応用生命科学部への関心を高めるとともに、本講座の周知時期を早めて受講者の増加に繋げたい。

【図表 3_Ⅲ_Ⅲ-2-1：2021年度及び2022年度受講者、修了証授与者、入学者数】

生命科学講座

年度	受講者	修了証授与	入学者
2021	19（3年生17）	15	14
2022	25（3年生19）	13	8

※2022年度から「応用生命科学講座」へ名称変更

食・環境ビジネス講座

年度	受講者	修了証授与	入学者
2021	6（3年生5）	3	2
2022	14（3年生10）	9	6

※2022年度から「生命産業ビジネス講座」へ名称変更

【図表 3_III_III-2-2：対面型及びオンライン型の受講者人数】

生命科学講座

年度	対面型		オンライン型	
	県内	県外	県内	県外
2020	中止		18	4
2021	13	0	4	2
2022	13	0	3	9

総受講者22名（県内18名、県外4名）

※2020年度はコロナ禍のため「対面型開講」は中止
 ※2022年度から「応用生命科学講座」へ名称変更

食・環境ビジネス講座

年度	対面型		オンライン型	
	県内	県外	県内	県外
2020	中止		4	0
2021	4	1	0	1
2022	4	0	6	4

総受講者4名（県内4名）

※2020年度はコロナ禍のため「対面型開講」は中止
 ※2022年度から「生命産業ビジネス講座」へ名称変更

■研究系部活動支援事業について

2022年度の研究系部活動支援事業は、14の学校から14件（新潟県内5件、新潟県外9件）の申請があり、申請内容の審議の結果、12校（新潟県内5件、新潟県外7件）を採択した。新規採択校は4校であった（新潟県内：高田、村上中等、新潟県外：長井、富山北部）。申請数は、2021年度の15の学校から16件（新潟県内6件、新潟県外10件）とほぼ同程度であった。2021年度の申請は理系の応用生命科学科の内容のみであったが、2022年度は理系の内容に加えて、新商品の開発や特産品による地域活性化など文系の生命産業ビジネス学科の内容を含む申請が3件あった。今後は、生命産業ビジネス学科の内容に関する申請を増加させるべく、ビジネスに関する活動を実施している商業高校などを中心に本支援事業を周知していきたい。

2022年度の研究成果報告会は、数年ぶりに新型コロナウイルス感染症対策を講じながら対面式の口頭発表会を実施した。例年、口頭発表は「生物」「地学」に係る活動内容が多いが、今年度は化学が3件、商品開発および地域活性化が1件ずつ含まれていた。2023年度は、参加者（部員・顧問）との交流会や大学見学を企画することで、研究系部活動とともに、本学への関心も高めていきたい。

【図表 3_III_III-2-3：新潟県内及び新潟県外の申請件数および採択件数】

研究系部活動支援事業_申請件数内訳

年度	申請校数	申請件数		
		新潟県内	新潟県外	計
2021	15	6	10	16
2022	14	5	9	14

研究系部活動支援事業_採択件数内訳

年度	採択校数	採択件数		
		新潟県内	新潟県外	計
2021	15(7)	6(0)	10(7)	16(7)
2022	12(4)	5(2)	7(2)	12(4)

※括弧内の数値は新規採択

以上のことから、高大連携講座および研究系部活動支援事業について概ね順調に実施できたとして評定をAとした。

III-3. 地域連携について **評定：S**

地域連携活動については、新潟市秋葉区、新津商工会議所及び南蒲原郡田上町（いずれも本学と包括連携協定を締結）との取組みを中心に、【図表 3_III-3-1：2022年度の主な地域連携活動一覧】の活動を行った。

コロナ禍であったが、活動全体として、アフターコロナを見据えた活発な取組みが実施されたことから、評定をSとした。

【図表 3_III-3-1：2022年度の主な地域連携活動一覧】

日付	連携機関	活動名（会議名）
6月1日	新津商工会議所	にいつまちづくり全体会（総会）
6月3日	新潟薬科大学との連携による まちなか活性化実行委員会	新潟市秋葉区・新潟薬科大学・ 商工団体による三者協議会
8月9日	田上町	大学連携協議会
8月31日	新潟市秋葉区	令和4年度 Akiha教育懇談会
11月22日	新潟市秋葉区	令和4年度 秋葉里山みらい会議
11月29日	新潟薬科大学との連携による まちなか活性化実行委員会	令和4年度 新潟市秋葉区と 新潟薬科大学との連絡協議会
3月20日	新潟薬科大学との連携による まちなか活性化実行委員会	新潟薬科大学との連携による まちなか活性化実行委員会「全体会議」

この他、主な地域連携活動としては、市民向け公開講座である「医療・健康講座」を新潟日報メディアシップ（新潟市中央区）において2回開催（コロナ禍のため2020と2021年度は中止）したほか、新潟市、新潟市秋葉区文化会館及び本学の三者による公開講座「秋葉区発健康・自立のひと・まち・みらいフォーラム」を主催し、本学から3名の教員が講演を行った。また、地域の企業や本学との関係機関、総勢200名が参加した「新潟薬科大学交流の会」が開催され、関係者間の連携強化につながった。

一方、薬剤師向けの卒後教育である「生涯研修認定制度」については、「薬剤師生涯教育講座」（年9回）をはじめ、テーマ別の「グループ研修」を実施した。

学生が地域社会に溶け込み、「貢献力」を育むための地域連携による教育活動を展開しており、「キャリア形成実践演習」等において、学生が企業の方々から得る、ものづくりや企業経営に関する知見等、経済活動を地域活性化にどのように結びつけるか等を学んだ。さらに、田上町教育委員会主催「ゆうゆう教室でのスライム実験教室」（テーマ：水をつかまえる）が開催され、本学の学生が小学生に対して実験のサポートやアドバイスをを行うなど、幅の広い世代間交流にも努めた。

本学は亀田製菓株式会社、新潟白根総合病院及び竹田総合病院（福島県会津若松市）との間で、それぞれ包括連携協定を締結した。締結後、応用生命科学部では亀田製菓から特定研究員を迎え入れ、両機関による共同研究を推進した。

大学連携については、高等教育コンソーシアムや新潟都市圏大学連合「SKYプロジェクト」（新潟青陵大学、新潟青陵大学短期大学部、新潟国際情報大学、新潟薬科大学及び新潟工業短期大学）における公開講座等を行い、後者については本学から講師2名が講演を行った。

さらに、「一般社団法人地域創生プラットフォーム SDGs にいがた」に入会した。これは、新潟県内で行われるSDGsに基づく企業活動や地域づくりを本学の教育研究に活かすことを目指して、2022年度はセミナー参加等、情報収集に努めた。

災害時における行政機関や地域社会との連携・協力関係の構築に向けて、新潟市秋葉区、秋葉区社会福祉協議会と本学の間で協議を行った。その結果、地域の要請に基づき、災害時には新津駅東キャンパス（一部）を一時的避難所として開放し、地域の安全・安心につながった。

なお、2023年度については、行政機関や大手スーパーマーケットチェーンとの間で包括連携協定を締結することで、教育研究活動に反映させるための基盤を整える。また、「薬剤師生涯教育講座」については、受講生にとって、より実践につながるプログラムを編成するため、職能団体（公益社団法人新潟県薬剤師会及び一般社団法人新潟県病院薬剤師会）との意見交換を行い、2024年度以降の講師選定に反映させる。

IV. 教員・教員組織について

IV-1. 教員組織について **評定：B**

学士課程専任教員数、授業科目への適切な教員の配置、教員の募集、採用、昇任等においては、適切に構成、配置、実施ができていますが、教員配置（年齢構成、男女比等）、教員の授業負担において課題が見出されたことから評定は B とした。それぞれの項目別に分析等を以下に記載する。

(1) 学士課程専任教員数

応用生命科学部学生収容定員 720 名に対する大学設置基準上の必要教員数ならびに本学部の教員数を【図表 3_IV-1-1：設置基準上必要専任教員数【学士課程】】に示した。本学部は大学設置基準の必要教員数を満たしており、本学部の教育研究方針を実践するための必要な教員数で構成している。

【図表 3_IV-1-1：設置基準上必要専任教員数【学士課程】】

設置基準上必要専任教員数【学士課程】（2022年5月1日現在）		※特任教員2名含む			
本学組織	収容定員	設置基準上必要数		本学教員数	
		教員数 (助手除く)	教授数	教員数 (助手除く)	教授数
応用生命科学部 応用生命科学科	480	10	5	20	9
応用生命科学部 生命産業創造学科	240	8	4	8	5

(2) 教員配置（年齢構成、男女比等）

本学部における教員の年齢構成を【図表 3_IV-1-2：教員の年齢構成表】に示した。50 代教員の割合が多い一方で、30 代若手教員の割合が非常に少ない状況であり、40 代以上の教員の割合が全体の約 9 割を占めることから、若手教員の増員が必要である。また、教育機関における若手教員は、①学生との共感性とコミュニケーション、②異なる視点と多様性の導入、③長期的な教育継承の確保、④新しい知識と研究の導入などの点において重要な存在である。今後、教員年齢構成の偏りがさらに大きくならないように計画的な教員採用を行い、教育研究上の支障を生じさせないように協議を継続する。

本学部女性教員の割合は、14.2%（28 名中 4 名）で、内閣府の男女共同参画白書令和 5 年版（https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r05/zentai/pdf/r05_genjo.pdf）第 10 分野に示されている大学・大学院の教員総数に占める女性の割合の 26.7%の半分程度に留まっている。女子学生が全体の約 1/3 を占める応用生命科学部では、女性教員の重要性は高く、計画的な教員採用を行うべきである。

【図表 3_IV-1-2：教員の年齢構成表】

年齢構成表（2022年5月1日現在）

年齢	応用生命科学部			(総数に占める割合%)
	応用生命科学科	生命産業創造学科	学部計	
30代	3	0	3	10.7
40代	4	2	6	21.4
50代	7	5	12	42.9
60代	5	1	6	21.4
70代	1	0	1	3.6
合計	20	8	28	100

※助手除く

(3) 教員の授業負担

応用生命科学部の教員別授業担当時間数を【図表 3_IV-1-3：教員別授業担当時間数】に示した。応用生命科学部の2022年度の平均授業担当時間数は約272時間であった。300時間を超える教員が30名中11名おり、うち2名は400時間を超えている。若手教員の研究活動を奨励する観点から、助教の授業担当時間数の軽減、研究室配属学生の指導数の軽減をするように努めている。全体的に授業担当時間数が多いことから、現状の教員数に沿ったカリキュラムの再構築、各教員の授業担当時間数の平準化に向けた方策を講じるための協議を継続する。

【図表 3_IV-1-3：教員別授業担当時間数】

	職位	担当毎 年間総時間		職位	担当毎 年間総時間
1	准教授	286	16	教授	322
2	教授	356	17	教授	351
3	准教授	251	18	教授	470
4	助教	307	19	准教授	303
5	准教授	247	20	准教授	191
6	教授	333	21	教授	366
7	教授	272	22	教授	106
8	教授	225	23	助教	134
9	准教授	225	24	准教授	76
10	教授	291	25	教授	301
11	助手	184	26	教授	276
12	教授	349	27	助手	111
13	教授	453	28	准教授	336
14	講師	300	29	准教授	206
15	助教	237	30	教授	298

(4) 授業科目への適切な教員の配置

教育上主要と認められる授業科目である専門必修科目における専任教員による担当比率は、応用生命科学科 100%、生命産業創造学科 100%であり、専任教員が適切に配置されている（2022年度開講科目）。また、助教以上の専任教員で博士号を有するものは、応用生命科学科で20名中18名、生命産業創造学科では8名中8名であり、専任教員は優れた専門知識を有し、本学部の目的に沿った教育研究成果を期待できる十分な教員組織を編制している。

(5) 教員の募集、採用、昇任等

応用生命科学部の将来計画を考慮した質保証推進委員会、教授協議会における協議において、「応用生命科学部を背負う重要な専門分野である環境工学分野、食品機能化学分野、遺伝子工学分野、応用微生物学分野の教育と研究の充実化には、その分野を活性化させる担当教員を配置する必要がある」ことについて議論された。

それら分野における教員採用の必要性が学長から認められ、学長の下に、各分野における担当教員推薦委員会を組織し、それぞれ分野の教授、准教授、准教授、特任助教の公募を行った。一次審査、二次審査を行い、各分野教員の推薦者を決定した。その後、応用生命科学部資格審査委員会において、「環境工学分野担当教授」、「食品機能化学分野担当准教授」、「遺伝子工学分野担当准教授」、「応用微生物学分野担当特任助教」と各推薦者の資格を認定し、学長に報告後、採用が決定された。

各分野の教員採用により、応用生命科学部の一端を担うべき上述した分野における高度な教育及び研究が実施され、応用生命科学部の基盤が固まると推察される。また、応用微生物学分野の特任助教は 20 代女性であり、教員組織の懸案項目であった若手教員割合、女性教員割合の改善に繋がった。

IV-2. FD 活動について（学部、研究科共通） **評価：B**

2022 年度は、FD 研修会を 8 回開催し、教員の平均参加率は 62% [本学部教員の平均参加率 40.8%] であった（昨年度：7 回開催、平均参加率 89% [本学部教員の平均参加率 65.6%]）（【図表 3_IV-2-1：2022 年度 FD 研修会一覧】）。昨年度に比べ平均参加率が下がった要因の一つは、全学を対象とした外部講師による FD の出席率の低さである。これは各学部、研究科が主催する FD と異なり、日程調整が行われないことや事前通知から開催日までが短いことが、教員のスケジュールとあわないことに繋がっていると考えられる。今後は教員のスケジュール調整が可能な余裕を持った日程等の事前通知、授業等が行われていない 8 月から 9 月中旬までの期間、あるいは 3 月の開催を検討する。

一方で、部局ごとにテーマを設定した研修（各学部、各研究科それぞれ 1 回開催）に関しては、高い参加率であった。これは授業、主たる業務が少ない 8 月、年度末におけるスケジュールの事前調整、検討項目の事前準備等があった計画性の高い研修であったためである。今後、各部局の課題に対する FD 研修等においては、各部局の教員の高い出席率が効果的な FD に繋がると考えられるため、教員の授業等が行われていない 8 月下旬から 9 月上旬に固定することが効果的である。

以上から、本学における教育内容・教育方法の改善に向けた取り組みに至っていないものと判断し、評価は B とする。

【図表 3_IV-2-1：2022 年度 FD 研修会一覧】

実施日	対象	参加者数	全教員 参加率	応教員 参加率	内容
8/19(金)	全学	40	51.3%	40.0%	高等教育機関における学修困難な学生への修学支援・就労支援～発達障害の特性がある学生を中心に～ 高等教育コンソーシアム久留米
8/26(金)	応用生命科学部	25	83.3%	83.3%	コンピテンシーと達成度評価用のルーブリックの作成に関するワークショップ 杉原教授（副学長）
8/29(月)	全学	26	33.3%	26.7%	障がい学生支援研修会 岡山大学教育推進機構
9/5(月)	薬学研究科	39	90.7%	26.7%	博士課程の現状と将来、本学大学院の今後の社会的な役割とニーズ 星名教授（薬学研究科入試委員長）
9/16(金)	応用生命科学部	23	76.7%	76.7%	今後の大学院における教育・研究と入試のあり方 木村教授（応用生命科学部研究科教務委員長）
10/7(金)	全学	49	62.8%	66.7%	「情報技術研究講習会」参加報告 ～ウィズ&ポストコロナ時代における大学に求められる新しい学びの方法、授業づくりを考える～ 飯村教授（薬学教育センター長） 共通化科目「情報リテラシ（基礎・応用）」について、および、データ分析の一例から学ぶ 星名教授（数理データサイエンス教育推進専門委員長）
11/14(月)	全学	24	30.8%	3.3%	健康寿命延伸に向けたデータサイエンス活用の有効性について 株式会社アイセック 代表取締役 木村 大地 氏 富永教授、星名教授（数理データサイエンス教育推進専門委員）
2/21(火)	薬学部	28	65.1%	3.3%	（第一部）『第2期薬学教育評価の方向性』 （第二部）『薬学教育モデル・コアカリ改訂について』 杉原教授（副学長）

V. 定員・学費の適切性について 評定：B

学費についての適切性を確認したが、定員充足率の低下対策と充足に向けた改革の協議を継続していく必要性が生じていることから評定は B とした。項目別に分析等を以下に記載する。

(1) 定員

応用生命科学部は、18 歳人口の減少の影響もあり、入学者数及び収容定員の未充足傾向が続いている。2022 年度の応用生命科学部の収容定員充足率は 71.1%（応用生命科学科 80%、生命産業創造学科 53%）であった（【図表 3_V-1：応用生命科学部 収容定員充足率】）。

2023 年度入試における応用生命科学科の入学定員充足率は 67%であり、2022 年度入試の 81%よりも減少した。専願入試（学校推薦型選抜試験及び総合型選抜試験）の減少が入学定員充足率の低下に直接繋がった。定員充足へ向けた施策と定員の適切性の協議を継続する。また、2023 年度の入試における生命産業ビジネス学科の入学定員充足率は 113%であり、生命産業創造学科から生命産業ビジネス学科への学科名称変更、並びに 60 名から 45 名への入学定員の見直しの影響があると考えられる。入学定員充足を維持する施策を行い、生命産業ビジネス学科の収容定員充足率の向上を目指す。

【図表 3_V-1：応用生命科学部 収容定員充足率】

・ 応用生命科学部 在籍者数 ※学校基本調査に準じて記載

学科名	収容定員	在学者数	収容定員充足率
応用生命科学科	480	385	80%
生命産業創造学科	240	127	53%
合計	720	512	71.1%

【図表 3_V-2：応用生命科学部 入学定員充足率】

・ 応用生命科学部 入学者数 ※学校基本調査に準じて記載

入学年度	学科名	入学定員	入学者数	入学定員充足率	
2020	応用生命科学科	120	101	84%	76%
	生命産業創造学科	60	35	58%	
2021	応用生命科学科	120	108	90%	79%
	生命産業創造学科	60	35	58%	
2022	応用生命科学科	120	97	81%	68%
	生命産業創造学科	60	26	43%	
2023	応用生命科学科	120	80	67%	79%
	生命産業ビジネス学科	45	51	113%	

(2) 学費

応用生命科学部の学費を【図表 3_V-3：応用生命科学部 学費】に示した。

旺文社教育情報センター調査による「2022 年度大学の学費平均額」によると、応用生命科学科と同系統の農・獣医畜産・水産学部系統/農芸化学では、入学金 253,333 円、授業料 1,017,923 円、初年度納入金 1,629,142 円であり、応用生命科学科の学費は全国平均とほぼ同等で適切であると判断される。

生命産業創造学科と同系統の農・獣医畜産・水産学部系統/農業経済学では入学金 255,000 円、授業料 877,429 円、初年度納入金 1,449,339 円、経済・経営・商学部/経営学・経営情報学・商学・会計学では入学金 227,802 円、授業料 789,972 円、初年度納入金 1,292,698 円であった。生命産業創造学科の学費は、経済・経営・商学部/経営学・経営情報学・商学・会計学の平均学費とほぼ同等で適切であると判断される。

しかしながら、全国的に前年度よりも入学金、授業料、初年度納入金が上昇しており、両学科とも状況を考慮した適切な学費設定の協議が必要になってくると考えられる。

【図表 3_V-3：応用生命科学部 学費】

大学名	学部	学科名	年次	学期	入学金	授業料	施設設備資金	合計
新潟薬科大学	応用生命科学部	応用生命科学科	1年次	前期	300,000	450,000	100,000	850,000
				後期	0	450,000	300,000	750,000
				合計	300,000	900,000	400,000	1,600,000
			2年次以降	前期	0	450,000	300,000	750,000
				後期	0	450,000	300,000	750,000
				合計	0	900,000	600,000	1,500,000
		生命産業創造学科	1年次	前期	300,000	400,000	100,000	800,000
				後期	0	400,000	100,000	500,000
				合計	300,000	800,000	200,000	1,300,000
			2年次以降	前期	0	400,000	200,000	600,000
				後期	0	400,000	200,000	600,000
				合計	0	800,000	400,000	1,200,000

4. 大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価

I. 教育活動について

I-1. 学生の受入れについて **評価:A**

2023年度入試(2022年度実施)では、これまでと同様に博士前期課程では8名、博士後期課程では3名を募集定員として学内ポスター掲示等の広報を行い、入学試験(推薦入試、一般入試)を実施した。

2023年度の入学者として、博士前期課程は6名、博士後期課程1名の入学生を受け入れた。2022年度は、博士前期課程9名、博士後期課程1名を受け入れたが、2023年度は、前期課程、後期課程ともに入学定員を充足することができなかった。

2022年度9月に開催された応用生命科学研究科FD「今後の大学院における教育・研究と入試のあり方」において、大学院への進学率を向上させ、入学者数増加の改革を求める多くの声があがった。志願者、入学者増加を目指した方策の一環として、2023年度一般入試第2期入試から専門分野の学力調査において、プレゼンテーション試験の導入を検討した。また、大学院進学率の向上に繋げるべく、「早期研究室配属制度」の条件緩和について検討を行った。

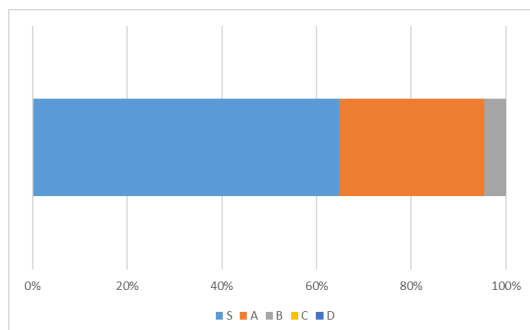
適切な取り組みがなされていることから評価をAとした。

I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について **評価:A**

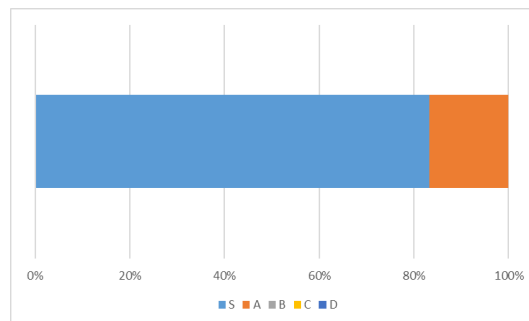
2020年度に改定された3つのポリシーに対応したカリキュラムが、2022年度時点で2年目となるが、前年度と同様に大きな問題もなく実施運用ができています。

授業科目は履修者に偏重がないよう隔年で開講するなど工夫し、運営している。在籍者が履修した科目の成績評価結果(【図表 4_I-2-(1): 博士前期課程在籍者成績評価内訳】、【図表 4_I-2-(2): 博士後期課程在籍者成績評価内訳】)から、到達目標を十分に達成できるような授業を提供することができていると判断できる。

【図表 4_I-2-(1): 博士前期課程在籍者成績評価内訳】



【図表 4_I-2-(2): 博士後期課程在籍者成績評価内訳】



また、入学時のオリエンテーションや成績一覧表に基づいて行われる履修指導、円滑な学位授与に向けた取り組みとして、年度当初に作成した研究計画書に基づき進捗状況を確認したうえで研究指導を行い、学生個々の状況にあわせた研究活動が実施されている。また、中間発表会の開催、博士後期課程には副指導教員制度を置くことで指導教員以外から助言や提言を受ける機会を提供している。

2022年度は、適正な論文審査の結果、博士前期課程応用生命科学コース6名、薬科学コース1名に修士（応用生命科学）の学位を、博士後期課程2名に博士（応用生命科学）の学位を授与した。

今後は、改定したカリキュラムについて検証し、課題の抽出、必要に応じた改善を実施する予定である。

適切な取り組みがなされていることから評定をAとした。

I-3. AP、CP、DP、3方針の整合性について **評定：B**

2020年度に応用生命科学研究科の学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー：AP）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー：CP）、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）の3つの方針を改正した。2022年度部局自己点検・評価報告書では、2020年度入学大学院生DPに対応したルーブリックを活用した大学院生の自己評価と教員の客観的評価のレベル差が検討課題とした他は、整合性が取れていると判断しており、本年度も同様に整合性が取れていると判断している。

博士前期課程の学習成果達成度評価に対し、新しいDPルーブリック表を作成し、実施をしたが、アセスメント・ポリシーに示されている指標を活用した質的・量的な解析の提示に至っていない点については、改善の余地があると考えられるため、評定をBとした。2023年度は、この改善作業を進める。

博士前期課程において2021年度に入学した大学院生対象のDPにおける学生の学修成果の把握のため、2年次3月の時点で、所属研究室指導教員との面談を、評価対象を明記した改正されたDPに対応したルーブリック表（4段階評価）を用いながら実施した。DPルーブリックは、「レベル1：かなり努力を要する」、「レベル2：努力を要する」、「レベル3：満たしている」、「レベル4：十分満たしている」、の4段階の尺度で作成した。

博士前期課程では、担当教員による客観的な評価では多くの項目が評価平均2を超えていたが、大学院生の自己評価は評価平均2未満であり、評価に隔たりが見られた。今後、指導教員と学生との間で、研究時間、研究環境等を考慮し、議論を重ねた上での実施可能な大学院指導研究計画書の作成が必要であると考えられる。2021年度に入学した大学院生DPルーブリック表の自己評価は平均1.81、客観的評価は平均2.22であり、昨年度部局自己点検・評価報告書に記載した2020年度入

学大学院生 DP ルーブリック表の自己評価平均 2.33、客観的評価平均 2.83 と比較して、全体的に評価が低下している。DP が改正されたこと、その改正された DP に沿ったルーブリック表に変更したことが前年度との評価の違いに繋がったと考えられる。2023 年度は、DP に対する DP ルーブリック表の各レベルの達成内容などの適性を考慮しながら、評価を実施して、必要に応じて協議を行いたい。

【図表 4_I-3-1：2022 年度応用生命科学研究科博士前期課程修了生 DP ルーブリック評価】

NO.	2021年度からのディプロマポリシー(DP)	評価対象	自己評価 (学生) 平均	客観的評価 (担当教員) 平均
1-1	1. プロフェッショナルナリズム	信頼されるプロフェッショナルとして社会に貢献する使命感をもち、法令を遵守し、応用生命科学に携わる研究者を目指す者としての倫理観をもって行動できる。	2.00	2.50
1-2		前例のない課題に対しても積極的に取り組み、解決に向けた方策を考案することができる。	1.83	2.17
1-3		常に自己を評価・省察し、自己研鑽を図ることができる。	1.83	2.17
1-4		後進指導の重要性を理解し、次世代を担う人材を育成することができる。	1.67	2.17
2-1	2. コミュニケーション力	他者を尊重し、協調・協働的に課題を解決することができる良好な人間関係を構築できる。	1.83	2.33
2-2		外国語文献から情報を収集し、さらに研究内容について討議し、研究成果を発信できる。	1.83	2.17
2-3		論文読解 セミナー・学会等での口頭発表、文章作成能力	1.50	2.33
3-1	3. 応用生命科学関連領域の高度な専門知識・技能	食品科学、バイオテクノロジー、生命化学及び環境化学に関する高度な専門知識・技能を修得する。	1.67	2.17
3-2		大学院指導計画書に対する達成度	2.17	2.33
4-1	4. 問題発見・解決力	食品科学、バイオテクノロジー、生命化学及び環境化学関連領域における諸問題を発見し、必要な情報を収集・評価して論理的思考をもとに研究計画を立て、柔軟な思考と深い洞察に基づいて研究を遂行できる。	1.50	2.00
4-2		研究状況	2.00	2.17
5	5. 社会貢献力	社会が抱える諸問題を客観的・数量的に分析し、その本質を捉え、科学的・論理的な思考に基づく解決策の提案を通して、信頼されるプロフェッショナルとして社会の発展に貢献できる。	1.83	2.17

博士後期課程においては、2020 年度に入学した大学院生対象の DP における学生の学修成果の把握のため、博士 3 年次 3 月の時点で、所属研究室の指導教員との面談を、DP ルーブリック表（4 段階評価）を用いながら実施した。2022 年度博士課程修了の大学院生は、博士後期課程 1 年次からコロナウイルス感染症の影響で、国際感覚を養う機会が非常に少なかったことから、項目 6 は低評価になってしまった。それ以外の項目の平均は、自己評価が 3、客観的評価が 3.5 であり、DP の達成度は高いと考えられる。

【図表 4_I-3-2：2022 年度応用生命科学研究科博士後期課程修了生 DP ルーブリック評価】

NO.		評価対象	自己評価 (学生) 平均	客観的評価 (担当教員) 平均
1-1	1. 極めて高度に専門的な知識および技術	大学院指導計画書に対する達成度	2.5	3
1-2		研究室での討議・学内外での発表	3	3.5
2-1	2. 課題発見・解決能力、研究遂行能力	大学院指導計画書の内容に対する達成度	3	3
2-2		研究状況	3	4
2-3		学外セミナー・学会への参加、発表	3	3.5
3-1	3. 協調力・継続力	協調性	3.5	4
3-2		継続力	4	4
4-1	4. 倫理観・論文執筆能力	倫理観	3.5	4
4-2		論文執筆能力	2.5	3
5-1	5. 幅広い素養・発信力	幅広い素養	2.5	3
5-2		発信力	2.5	3.5
6-1	6. 語学力・国際感覚	語学力	1.5	1.5
6-2		国際感覚	1	1

II. 教員・教員組織について **評価：B**

大学院課程専任教員数、授業科目への適切な教員の配置、教員の授業負担においては、適切に構成、配置、実施ができていますが、教員配置（年齢構成、男女比等）、教員の募集、採用、昇任等においては取り組むべき課題が見出されたことから評価はBとした。項目別に分析等を以下に記載する。

(1) 大学院課程専任教員数

大学院設置基準上の必要人数並びに、本研究科教員人数を【図表 4_II-1：設置基準上必要専任教員数【大学院課程】】に示した。

博士前期課程の応用生命科学コース、理科教職専修コース及び博士後期課程の大学院教員は、応用生命科学部の教員が兼ねて担当している。また、博士前期課程の薬科学コースは、薬学部の教員が兼ねて担当している。本研究科は大学設置基準の必要教員数を満たしており、本研究科の教育研究方針を実践するための必要な教員数で構成している。

【図表 4_II-1：設置基準上必要専任教員数【大学院課程】】

設置基準上必要専任教員数【大学院課程】（2022年5月1日現在）

研究科	専攻	収容定員	設置基準上必要数				本学教員数		
			研究指導教員数	うち教授数	研究指導補助教員数	計	研究指導教員数	うち教授数	研究指導補助教員数
応用生命科学研究科	応用生命科学専攻 (博士前期課程) ・応用生命科学コース ・理科教職専修コース	16	4	3	2	6	19	9	0
	25						14	0	
	応用生命科学専攻 (博士後期課程)	9	4	3	4	8	7	0	

※助手除く

(2) 教員配置（年齢構成、男女比等）

学部と同様に若手教員、女性教員割合の課題を抱えており、協議の継続が必要となっている。

(3) 教員の授業負担

教員間での授業担当時間はほぼ平準化されている。また、大学院授業科目は学生数に対して選択科目数が多いため、隔年開講にして、各授業科目の履修者を一定数確保し、グループワーク、ディスカッション等をできる教育環境を整えている。これは大学院の教員担当授業時間の負担減に繋がっている。

(4) 授業科目への適切な教員の配置

全科目を専任の教授、准教授、講師、助教が担当しており、適切に教員が配置されている。

(5) 教員の募集、採用、昇任等

博士前期課程の担当教員候補者の資格審査を実施した。博士前期課程環境工学分野担当教員任用について、推薦委員会を設置し、推薦委員会による書類審査及び協議を経て、大学院応用生命科学研究科担当教員資格委員会で資格を認定後、学長に報告し、採用が決定された。

Ⅲ. 定員・学費の適切性について **評定：B**

博士前期課程の収容定員充足率は適切性が確認されたが、博士前期課程の入学定員充足率、博士後期課程定員、学費についての課題が見出されたことから評定はBとした。項目別に分析等を以下に記載する。

(1) 定員

2022年度の応用生命科学研究科の収容定員充足率は88%（博士前期課程106%、博士後期課程56%）であった（【図表4_Ⅲ-1：応用生命科学研究科 収容定員充足率】）。博士前期課程は収容定員を充足しているが、2023年度大学院入試における入学定員充足率は、2022年度大学院入試の113%から63%に低下した。大学院進学への魅力とメリットを積極的に学部生へアピールする機会を設けるなどの施策による入学定員確保が課題となる。博士後期課程は、定員充足率が56%であり、社会人がその半分以上（3名/5名）を占めている。また、博士後期課程入学者定員充足率に至っては33%である。博士前期課程からの進学者が減少している中、柔軟な学習形態（オンライン授業、遠隔教育等）の提供、企業との連携強化による社会人博士後期課程入学者を増やしていく等の必要性がある。

【図表4_Ⅲ-1：応用生命科学研究科 収容定員充足率】

・ 大学院 在籍者数 ※学校基本調査に準じて記載

学科名	課程	収容定員	在学者数	収容定員充足率	うち社会人	うち留学生
応用生命科学研究科	博士前期課程	16	17	106%	1	1
	博士後期課程	9	5	56%	3	0
合計		25	22	88.0%	4	0

【図表 4_III-2：応用生命科学研究科 入学定員充足率】

・大学院 入学者数 ※学校基本調査に準じて記載

入学年度	課程	入学定員	入学者数	入学定員充足率
2020	博士前期課程	8	6	75%
	博士後期課程	3	2	67%
2021	博士前期課程	8	8	100%
	博士後期課程	3	0	0%
2022	博士前期課程	8	9	113%
	博士後期課程	3	1	33%
2023	博士前期課程	8	5	63%
	博士後期課程	3	1	33%

(2)学費

大学院学費は、開設以来据え置いた状態で、他私立大学院と比較し極めて安価であったことから、改定へ向け検討が行われた。その結果、他の大学院の水準に合わせ、2023年度入学生から年額90万円（2022年度までの入学生60万円）に増額が行われる。内部進学者が多数を占める実情から、内部進学者の学納金は国立大学大学院並みの53.5万円まで減額をすることになった（本学の学部卒業者及び大学院博士前期課程修了者については、入学金の全額、並びに施設設備資金の2分の1相当額を免除）。

大学院生の存在は、研究室における教育と研究の質向上に大きく貢献している。このような状況を考慮し、2023年度から大学院進学者の経済的サポートと積極的な後進指導推進の観点から、応用生命科学部授業に積極的にTAとして雇用することを、応用生命科学部教務委員会を中心に調整していくこととした。

